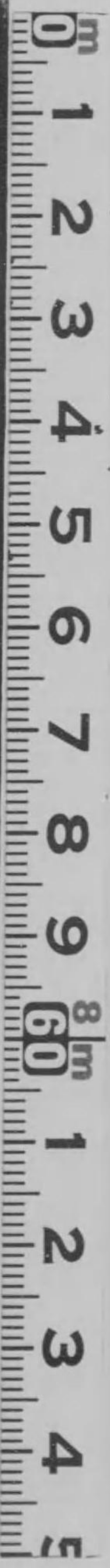




392  
270



始



392-270



心  
初  
禪  
師

大正  
10 12 27  
內交

吉靖宗師著黃檗天真開山了翁禪師傳頌德

普全菩薩行 顯現大圓鏡

法遍界三千 菩提作麼映

黃檗山主 大雄和南題

## 序

學校及寺院を原動力として社會改良を提唱する余は、「了翁禪師」を讀みて其所信を強むることを得たり、蓋し了翁禪師は近世佛教史上の權威たり夙に傳ふべくして傳はらざりし隠れたる偉人也。少壯志を立つるや隱元に參じて法を高泉に嗣ぎ家風綿密、禪刹を處々に關いて黃檗禪を鼓吹し、大藏經を請來し、内外の墳典を集め普く文献の事業を圖り、勸學院を建て江湖の學徒を收容し専ら育英の道を講じ、或は施藥施療の館を設けて佛陀の慈悲を現はし或は貧者窮人孤兒棄兒を救濟して教化の實を擧げ、或は水利土木

の業を起して濟生利民の本願を達したるが如き、其道高く其徳深く、其功蹟の顯著なる世人皆「活如來」「菩薩の權現」なりと敬稱したる亦宜べなりと謂ふべし。然るに余の如きも了翁の名さへ曾て故井上友一博士が「孤兒より出でし了翁禪師」と題し感化救濟事業家の模範として紹介せられたることありしを記憶するに過ぎざりき。古人謂ふ先徳道有り世に昭々たらざるものは後人の愆なりと余は嵩君の努力に依りて二百餘年後了翁禪師の人格美に接することを得たるを悦ぶもの、敢て其の序を辭せざる所以なり。

大正十年七月

田子一民

### 緒言

私が難僧の頃、授業師なる人が茶話の折々、了翁といふ秋田から出た人が僧態をも厭はずに、薬を賣つて其の願業の資本を作つたといふ事を聴かされたものであります。大正二年内務省主催感化救濟事業講習會に出席した時、偶然にも亦た當時の神社局長 井上友一博士が「孤兒より出でし了翁禪師」といふ一枚刷のものを會員に配布されて了翁の事を紹介せられました。其際、井上博士は私に向つて「君等の如き人こそ了翁禪師を模範とすべきである。君等の先輩たる了翁は二百有餘年前にかくも立派に、今日我等が一生懸命試みつゝある所の感化救濟の事業を實行して居るではないか、實に敬服の至りである。殊に君等は了翁と同郷の因縁もある方だから、活きたる宗教家として了翁の事蹟を調べては如何」と慫慂せられました。此の事、念頭を去らざる間に井上博士は故人となられたるが、私も種々事情のために之等の事を等閑

に附して居りました。且つ在來の佛敎史や辭書類には僅か二三行を費やして了翁といふ名を傳へて居るばかりで殆んど研究の端緒がありません。處が、大正八年の秋、私の授業師が諸方面を搜索して辛つとの事で、『天真院了翁禪師紀年録』及び『佛國了翁和尚語録』といふ二冊を私に興へられました。この二冊は了翁の弟子仁峯といふが編したもので元祿十五年から十六年あたりに開版されたものであります。私はこの二冊を唯一無二の典籍として其後二年餘に亘り私の力としては出來得るだけの調査を致しましたが、全く埋れたる大石のその如き了翁の全身は中々容易に窺ひ知ることが出來なかつたのであります。私は唯だ此二書を骨子とし、『普照國師隱元廣錄』、『眞宗國師木庵語録』、『鐵眼禪師遺錄』、『慧林禪師語録』、『黃檗宗鑑錄』、『高泉禪師末後事實』、『江戸名所圖繪』、『江戸黃檗禪刹誌』及び今日流行して居る佛敎史や禪宗史を皮とし肉として、兼ては私の研究により得たる斷片零墨の果までも漏さずに、いろどりしました。而して紀年録、語録の二書に至ては漢文を、國譯したばかりで一字一句をも捨てぬ様

に書き綴りましたのです。私は多年の望みを達せんがために費やしたる努力の收穫がこんな貧弱なものであることを遺憾とするものであります。唯だ我が了翁の一生に於ける行動が、少くとも佛敎史上に占むる位置としても、黃檗禪の側面史觀たるを失はぬ價値ありとせば、日本近世に於ける文化事業、或は敎化運動者として我が了翁も亦た不滅の生命を保つて居るものなりと信じます。況んや秋田は古來偉人とし云へば平田篤胤、佐藤信淵の二先生をのみ舉ぐるも我等はこの二先生を有する光榮と俱に、新たに了翁を以て秋田より出でし最も秀でたる偉人であるといふことを、天下に推奨するを得るの光榮をも有するものであります。

大正十年五月綠蔭窓下に識す

著者

## 凡 例

一、本書印刷後、了翁に関する資料の發見せられたるもの多し。殊に乞食桃水と了翁とは同じく高泉を師とせし兄弟たりしが如きは貴重なる事の一なりと思ふ。桃水が極端なる消極的行動は乞食非人の群れに雜じりて其の聖き生涯を送りたると、了翁が積極的に社會教化の奉仕者たりしが如き、一味の黄檗禪を喫得したる此の二人者の三昧は、時代風潮が人生に於ける彼等の活路に明暗雙々底の影を投げたるかを偲ばしむるものであります。私は再版の際更に江湖諸賢の教を仰いて増補修正せんことを期する次第あります。

二、黄檗宗管長隆琦大雄貌下が特に本書のために題偈を賜りたると田子内務省社會局長の序文を辱ふすることを得たるは、著者の光榮とする所であります。

三、本書出版に就て、天真院住職鈴木惠眼老師（了翁の開山場たる宇治黄檗山に在り

て了翁の法燈を傳ふる人) 及中央佛教社主幹飯塚哲英氏並びに了翁の出生地たる郷土の人々殊に鶴沼作右衛門由利慶藏佐藤長藏君等の厚意を蒙りたること尠からず、且つ赤石兼三君の如きは種々なる便宜を與せられたるは著者の感激する所謹んで茲に謝意を表する所以であります。(吉靖)

# 了翁禪師

目次 (了翁年譜を以て之に代えます)

## ○了翁年譜

- 了翁壹歳(寛永七年) 紀元二千二百九十年、明正天皇の御宇、三月十八日秋田縣雄勝郡八幡村に生る。
- 了翁二歳(寛永八年) 母永見氏を喪ふ。
- 了翁八歳(寛永十四年) 養父歿す。
- 了翁十一歳(寛永十七年) 隣村の密院に投せらる。
- 了翁十二歳(寛永十八年) 同郡岩井の龍泉寺に入る。
- 了翁十四歳(寛永廿年) 奥州の平泉に行く。



了翁十五歲(正保元年) 郷里の八幡社に祈る。  
了翁十八歲(正保四年) 米澤の文殊堂に詣づ。  
了翁十九歲(慶安元年) 仙臺の瑞岩寺に雲居禪師を訪ふ。  
了翁二十歲(慶安二年) 秋田の天徳寺に掛錫す。  
了翁廿三歲(承應元年) 長崎に抵りて隱元禪師を迎ふ。  
了翁廿四歲(承應二年) 備後の仁山和尚に寓す。  
了翁廿五歲(承應三年) 長崎の興福寺にて隱元禪師に謁す。  
了翁廿六歲(明暦元年) 病を忘れて普門寺に抵り隱元禪師に參禪す。  
了翁廿七歲(明暦二年) 病を忘れて普門寺に抵り隱元禪師に參禪す。  
了翁廿八歲(明暦三年) 病を忘れて普門寺に抵り隱元禪師に參禪す。  
了翁廿九歲(萬治元年) 參禪に餘念なし。  
了翁三十三歲(寬文元年) 隱元禪師宇治に黃檗山を開く。了翁即ち隨侍す。又、長崎

に至て即非禪師を訪ふ。

了翁三十三歲(寬文二年) 欲を斷たんがために去勢す。  
了翁三十四歲(寬文三年) 勝尾、長谷、清水の三所に謁し又伊勢、多賀の二神に祈る。  
了翁三十五歲(寬文四年) 江戸に在りて神夢に感じ、靈藥錦袋圓を創造す。  
了翁三十六歲(寬文五年) 關東に勸化す。  
了翁四十一歲(寬文十年) 金三千兩を積んで大藏經を購ふ、了然を改めて了翁と號す。  
了翁四十二歲(寬文十一年) 江戸の不忍池に辨天島を築く。  
了翁四十四歲(寬文十二年) 棄兒數十人を拾ふて養ふ。  
了翁四十四歲(延寶元年) 上野に勸學寮を建立す。  
了翁四十五歲(延寶二年) 臺密禪の道場に大藏經を安置せんと發願す。  
了翁四十六歲(延寶三年) 不忍池畔に錦袋圓藥舗を建つ。  
了翁四十九歲(延寶六年) 臺密兼學の法印を受く。

了翁五十一歲(延寶八年) 閣老稻葉澁州に托して大藏經壹萬卷及儒書五千卷を購ふ。  
了翁五十三歲(天和二年) 藥舖燒失して、墳典一萬四千卷を燒く。東叡山下に地若干  
を賜ふ。

了翁五十四歲(天和三年) 饑饉に際し、青銅一千一百餘緡、黃金壹千兩を施して救濟  
す。

了翁五十五歲(貞享元年) 勸學院並に客院を建て、經庫二棟を造りて内外の墳典三萬  
餘卷を備ふ。

了翁五十六歲(貞享二年) 輪王寺法親王の命によりて勸學院權大僧都に任せらる。

了翁六十歲(元祿二年) 天臺山に登りて大會に預る。

了翁六十一歲(元祿三年) 濟北院を重興す。

了翁六十三歲(元祿五年) 高泉禪師に佛國寺にて參禪す。

了翁六十四歲(元祿六年) 白金百五十兩を學寮へ寄附す。

了翁六十五歲(元祿七年) 臺密禪廿一ヶ所の道場に廿一大藏經を納む。

了翁六十六歲(元祿八年) 高泉禪師の大法を相續す。

了翁六十七歲(元祿九年) 天真院内に文庫を建つ。

了翁六十八歲(元祿十年) 五介の庄の灌漑工事を成就す。

了翁六十九歲(元祿十一年) 徳大寺を重興す。回祿の災難に遇ふて黄金百兩を施して  
病者飢者を救ふ。

了翁七十歲(元祿十二年) 天真院を仁峯に譲り自得院に退休す。觀音小銅像三十三萬  
三千三百三十三體を古稀壽の紀念として天下に施す。

了翁七十二歲(元祿十四年) 佛國寺の請に應ず。

了翁七十三歲(元祿十五年) 佛國寺を大隨に譲りて閑居す。

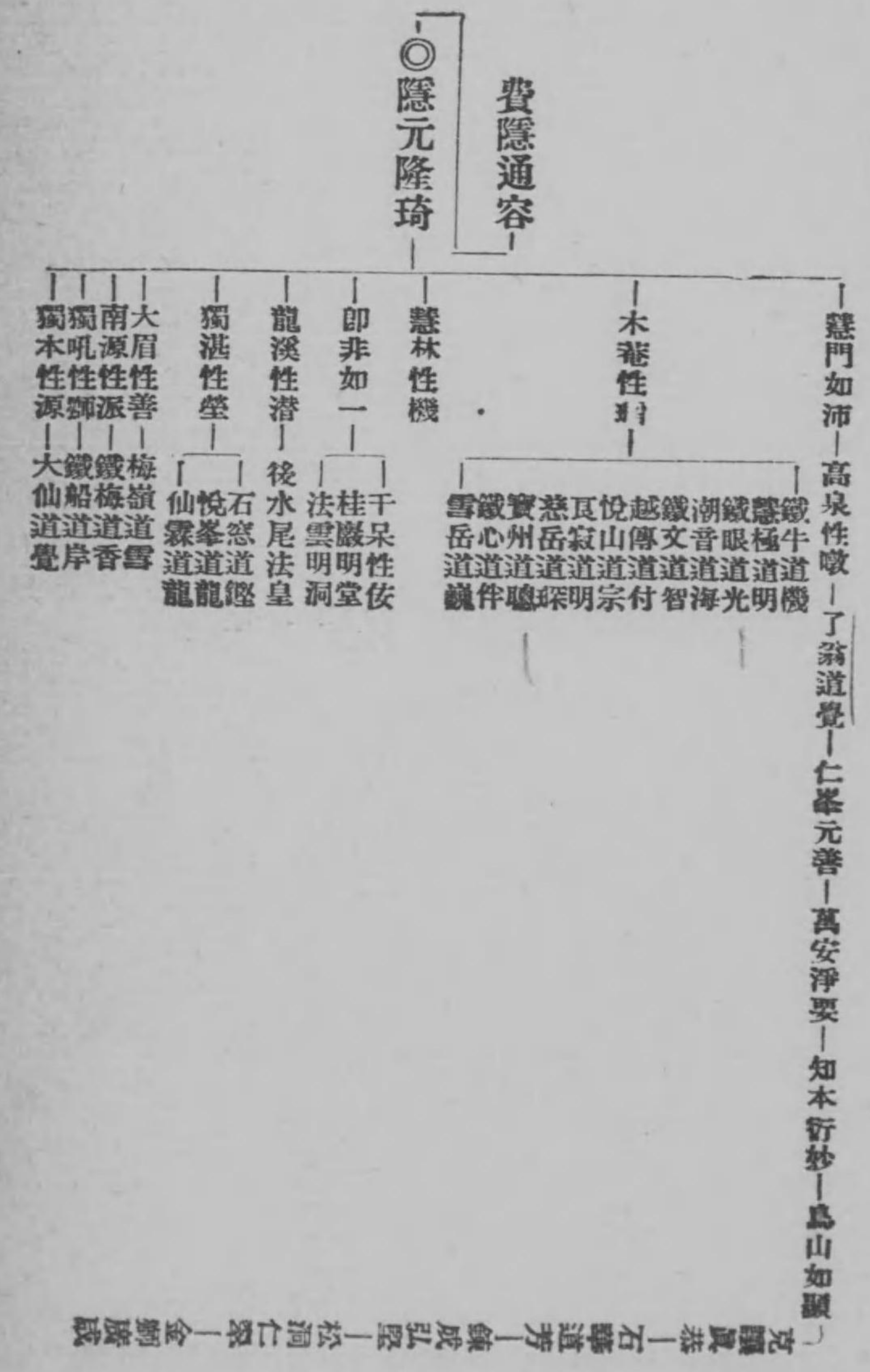
了翁七十四歲(元祿十六年) 省行堂を建て、病僧を養はんと欲す。

了翁七十五歲(寶永元年) 勸學寮燒失の報を聞き江都に上りて之を重興せんと欲す。

峩山の直指庵に遊び、又西照寺を開く。  
 了翁七十六歳(寶永二年) 再び江都に出て聖恩を謝す。  
 了翁七十七歳(寶永三年) 江都に在り諸候を問候す。  
 了翁七十八歳(寶永四年) 老病のために江戸を出て宇治に還り佛國寺に入り療養す。  
 後事を弟子に托して遷化す。

(了翁年譜) 終り

◎了翁の法系





禪師

嵩吉 靖著

昔の江戸は今の東京、上野不忍池に辨天島を築きたる、了翁禪師、諱は道覺と申し初め了然と稱しました、出羽國雄勝郡八幡村の人であります、父の姓は鈴木氏で、諱は重孝と申し、母は永見氏であります、人皇百八代明正天皇の御宇、寛永七年三月十八日、この世を照らす太陽が、真直に光と熱とを、地上に投げて居る、午の刻に生れました、蝶よ花よと可愛がらるゝ母は、了翁が、やつと二歳になりしばかりの時に、死んだのです、襦袢の中から既に孤兒となられし了翁は、素より裕かならぬ家の、而

も男やもめとなりし父の手一つで、養はれましたが、雨の日、風の夜となく、貰ひ乳に通ふ父の精根も、身は濡れて、子は袖笠の時雨に窶れ、到底この兒を、育てかねるより、同村なる高橋何某といふ情の門に頼みまして、行末の事までも願ふたのであります、高橋の家には姉妹二人の兒もありましたが、了翁が里子にやられてから、幾年もならぬ中に、高橋夫妻は枕を並べて病死せられ、涙の痕も乾かぬ間に、二人の義姉妹も亦た相續いでこの世を去りました、不幸なる孤兒よ、造化の神は三世相を裏書して、娑婆の舞臺に演ずる因果の物語、人生の悲劇のみ好むものか、了翁はかくてまた遺兒となりました、枕する膝もなく、乳を索むる懷ろをも失ひし了翁は、復我が父の許に戻らねばならぬのでありました、父一人、子一人、働かねば其日の生活ができぬ父は止むを得ず、伯父某の力に依りて了翁を養育することになりました、斯の時了翁僅かに八歳であります、然るに運命の魔の手二たび三たび孤兒たり遺兒たる了翁を翻弄しても猶ほ、あきたらぬものか、やがて亦た了翁が縋りし生命の柱ともいふべき伯

父は病んで没くなりました、そこで再び了翁は我が父の家に歸へされました。一族親縁打集り涙の袖を搾る五月雨の音も濕やかに、この兒の處置に窮する頃、帛を裂く鳥の聲々、躑躅の花こぼる、初夏の山里、口善悪なき郷童は、いろ／＼な噂を傳へました、斯の了翁は不祥兒である、不吉兒である、凶兒である、母を食ひ、親戚を啖ひ、兄弟を食ひ、伯父をも食ふ惡魔である、家に不利なる餓鬼であるといふて、父にも説く人さへありしかば、父も自然に了翁を厄介視し、邪魔物扱ひする様になりました、了翁が十一歳の時、遂に隣村なる吉祥院といふ密寺に投げられました、棄てられましたのであります、父にも見離された了翁は、親族から種々なる虐待を受けたるのみならず、現在の不運は過去世の業累あるためなれば、罪障消滅の犠牲として、三寶を信じ佛門に入るべきのみだと因果を含めらるゝのであります、が了翁は更に出塵の意はなく屢々之を拒絶しました、貧しき父は背に腹は換へられずとて、了翁が十二歳の時、無理解なる了翁を伴ふて、同郡岩井川の龍泉寺といふ禪寺に遣はしました、それ

より了翁は寺にありて、鳥を驅くる行童として、まめくしく勤めました、簡易枯淡なる禪生活の事なれば、和尚さんが水を汲めば小僧が柴を拾ふ、小僧が飯を焚いて居れば和尚が味噌摺鉢を鳴らす、風呂も焼けば便所も掃除するといふ綿密の家風であります、了翁が骨身を厭はずに作務する様を見ては、誰彼の別なく感心して了つたのであります、偶々隣村に齋藤自得といふ居士がりましたが、時々、寺に行きて了翁の忠勤振を見る毎に、養ふ母、育くむ父なき了翁をつくづく不憫で堪まらなくなりました、或時居士は了翁を近く呼び寄せて其人相を観察すると、非凡の瑞相がある様です、すから累りに了翁を勸めて出家せしめました、この自得居士といふは博學の君子で篤く佛法を信じた方であり、その子孫は今も秋田の植田村に現在して、了翁から授けられた「源太膏」といふ薬を家業として居る齋藤自圓といふ舊家があります、了翁が自得居士の勧めによりて、髪を剃り衣を染めて専ら禪門の教育を受くる様になりますると居士は自費を投じ他より一兒を雇ひ來りて、了翁の代りに薪水の勞に服さしめ

置きました、居士が斯くも了翁を外護せられし動機は勿論數奇なる運命に泣く了翁の生立に同情せられしのみならず居士にも掌中の珠として愛せられた男子がありました、が、短命にして世を早くしました、然るに了翁の容顏は夢さながらに我が亡き兒に似通ふて居る所から、焼野の雉子、夜の鶴、兄にてやありけん、弟にてやありけん、同氣連理の枝に鳴く親心より、我が亡兒と思ひなして了翁の立身を待ち詫ぶるのであります、了翁は性質頗る伶俐でありましたから、師の坊より習ふ經咒も能く覚えまして、辨道數年の後は、内典外典の學にも通じる様になつたのです、了翁、一日禪觀を修する時、立ち昇る香煙脈々おぼろなる處、靜かに自己の影を顧みて、儂なき身の上を悲みました、大丈夫既に親を辭し、志を決して緇を被る以上は、我が意も等しく、何れの所をか超越せなければならぬ、父母に甘味を供することもせず、六親固より離れたる身の出家沙門たる我が立脚地といふべきものは何であらう乎、國を安んじ邦を治むることできず、祖先よりの家業も頓に繼嗣を捐てねばならぬ、是も亦た因縁と

六  
諦めやうか、緬かに郷黨を去つて桑門に入り、髪も剃り師にも教を稟けた、發足超方  
心も形も俗と異なつたからには何をくよくよ宿業を恨むべき、希望の星は彼岸に輝き  
理想の月は涅槃の雲に残る、孤兒、遺兒、棄兒、而して不祥不吉の子であると咒咀せ  
られたる我や了翁も、心機一轉、内には克念の功を勤め、外には不諍の徳を強め、聖  
種を種え、魔苗を枯らさねばならぬ、是れが自得居士の我に出家を勧めた趣旨にも叶  
ふのだ、四恩を報じ三有を濟ふ事も是れからである、經の一字を離れても魔説に陥る  
も、別傳の宗趣は文字禪ではない、文字から得たる知慧には魂がない、この目で見、  
この耳で聞き、この手で觸れ、この足で踏んで初めて衆生の肉に佛の魂が生きたるで  
あらうと内心の叫びに覺醒したる了翁は茲に撥草瞻風の旅程に上ることになりました  
了翁が十四歳の春、震たなびく須川岳を越えて、奥州路を指しての雲水行脚、地織木  
綿の大風呂敷に、沙門が世帯の十八物を包み、白脚絆に草鞋冷たく、袈裟文庫を肩に  
掛けたる少年僧よ、兵士共の夢を驚かして夏草繁き平泉に到り中尊寺の舊蹟を探り尋

ねました。

抑々この中尊寺といふは、五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年慈覺大師が開基せし靈  
刹であります、東は高館及び平泉館に對し、東山の連峰逶迤たる處、北上川の長流  
洋々たる畔、西は關門の古跡ありて、遠く駒ヶ岳を望み、南は鷄足の洞鐘が岳より毛  
越寺、達谷に達し、北は琵琶棚の舊墟、衣川の流れを負ふて山地の一仙境、老樹蒼々  
まことに絶塵の淨域であります、七十三代堀川天皇の御宇、長治二年鎮守府將軍藤原  
朝臣清衡に當寺を經營すべき旨の勅ありて、同二年二月工事を起し、堂塔四十餘宇、  
僧坊三百餘宇を建て列べ、天仁二年に到りて其功竣りますると即ち鎮護國家の勅願  
所となし給ふたのであります、七寶の莊嚴を盡し、林園を開き、築垣を繞らし、泉水  
を湛へ、橋梁を架しての極樂淨土、諸天、天鼓を鳴らせば、梵音海潮音霞むといふ、  
實にや沙漠の如き奥州の野の藪に輝く、一塊の黄金の如く海内屈指の美觀でありまし  
た、三代の豪華常に帝京に擬したる藤原氏も文治五年源賴朝のために没落して、朱

樓碧殿その影暗く、英雄割據の地、唯だ東山の月のみが五月雨に降り残せし金色堂を照らして居つたのです。

物換り星務りて幾百年後、諸堂の葺瓦破れ壞れて、雨漏り、柱梁朽ち腐れて、鳥雀巢ふといふ慘狀、それに都鄙騒亂の兵火に罹り天下の昆玉麗金の寶什までも散亂して唯だ經藏と金色堂のみが蕭々たる松樹の間、あはれ空しく有りし世の面影を留むるのみです、春風に錫を立て、此の斜陽を眺めたる了翁は、如何にもして舊觀の美を復し平泉を以て東北佛教の中心地とせねばならぬと發憤したのであります、が空拳徒手其術を知らねば唯だ平等心を以て墓趾と爲すべく他日の希望を抱いたのであります、即ち了翁が伽藍神を以て自ら任ずる様になつたのであります、低徊多時、了翁は感慨の目を開いて、金色堂及經藏を拜みました、金色堂は天仁二年清衡の建立する所、三間四面、内外上下、悉く籠布を掛け黒漆して其地を厚くし、金箔を貼し、金色を輝かしてあります、内部は鐫柱彫梁皆な螺鈿珠玉を鏤め、中壇の四隅には七寶丹青の柱

を立て、柱毎に十二光佛を圖し壇上には三尊の黄金佛等を安置してあります、經藏もまたこの金色堂に劣らぬ壯麗なもので、藤氏三代が寄附する所の一切藏經を納めてありました、其函廣さ七寸長さ一尺五分、高さ三寸三分、黒漆にして蓋には螺鈿を以て經卷の題目を鏤めてあります、清衡の納めしといふは紺紙金銀泥にして、一行交りであるが、是は堀河鳥羽兩天皇の勅願によりて自在房蓮光が奉行となりて、八ヶ年の星霜を費して書寫せしめたものと傳えてあります、基衡の納めしは紺紙金泥のもので、秀衡の納めたものは黄紙宋版のものであります、了翁は藤氏三代父子が信佛護法の芳躅も今の慘憺たる現状を見るに忍びず遺憾やるかたなく、空索たる鉢囊を傾けて祇だ散失せし經卷たけなりとも收拾して當來の微因を植へ置かんと誓願したのであります、是れこそ了翁が終始一貫したる興造弘經の大願、伽藍佛法の事業の第一着手でありました、東に尋ね西に討ねて只た五六帙のみ得ましたが、せめてもの心遣りなれば是を中尊寺に奉納したのです、斯の時、了翁沁みくと興造弘經の方便も、社會



救済の事業も佛が不淨財なりと誡めたる財施の力がなければ、到底至難であるといふ事を痛切に感じたのです、一日、自ら嘆じて云ふ、我れ空門に入ると雖も其の根性劣にして、佛祖の大道を體解すること容易ならず、況んや又其の精進勇猛の力も古人と比すること能はず、佛陀の福音は、苦海に浮沈する衆生を救ふの船たり筏たるもの冥より冥に迷ふ我等を照らすの燈明臺である、我れ、生死海の渡守となること能はずとも願くば、一切藏經を世間に流布して文献の正業を營み、有情非情をして見佛聞法の良縁を結ばしめねばならぬ、是がやがて我身に相應せる般若の使命であらう、尙し我が今生に於て障縁ありて、此の大願成就せざる場合は、骨を削りて筆となし、血を啜りて墨を濺ぎ、但だ大般若經六百卷を自ら寫して、以て、初一念を償ふべきのみと、遂に誠を輸して誓願を立て、三世の諸佛、一切の護法神に禱りました。

(二)

了翁が十五歳の夏即ち正保元年八月十五日郷里に歸りました、父を省みました序で我が産土神なる幡野の八幡神社に詣で、默祝して申上ぐ、八幡大菩薩は是れ釋迦文佛の跡を垂れ給ふ所、常に三寶を擁護し玉ふ、希くば我が弘經の大願速かに圓成せられんこと、設使、此の生前に果すこと能はずんば、盡未來際をかけて休まずと、了翁が一生涯燃え續きし護法の炎が胸底深く點せられたのもこの時であります、因つて神社の境内に手ら杉木五百餘株を植えました、爾來幾十星霜、鬱蒼たる樹影は神社の風致を添ふると共に神威の壯嚴を保つて居ります、現在今も了翁が手植の杉といふものが十六七本残つてあります、古老の傳ふる所に依れば、斯の幡野村の八幡宮は往昔白子といふ所に鎮坐ありしもので、延暦の頃彼の田村將軍利成が夷賊征討の際、常に信じて居たる八幡大神の靈夢に感じ給ふ、金色の鷹が空中に飛び廻り、この白子の森の樹に止りしかば、此の地を相して社堂を建て、延暦十年辛未八月十五日に到り神靈を遷し奉りたるもので、靈驗いやに嚴かなれば、了翁は此堂に立籠りて苦行修練

すること凡そ四ヶ年でありました、見聞覺知の消息を停めて、山河大地を神鏡の中に  
観じ、念想觀の測量を絶して霜天月落ち夜將さに半ならんとする處、只管自身の業累  
を懺悔して神力の加護を祈るのでありました、一夜、松風颯々たるを聞いて不思議  
底の夢心地、明滅たる燭影は我影を照らして寒く、あり／＼と神の好相を見届ける事  
を得て、身心快樂を覺えましたたが何人にもこの奇異の事を語らなかつたといふこと  
す、されば後年、了翁が宇治の天眞院を開かれたる元祿二年の秋、巨額の淨財を喜捨  
して斯の八幡社を營造して再興の効を遂げ、以て神徳を報謝せられました、爾來郷人  
も亦た格別の信仰を傾けて、一村の産土神と尊ぶ様になりましたので、明治五年七月  
には村社の格に列せらるゝ様になりました、了翁が献納したる絹地に菊の御紋章織な  
る八色八筋の旗、赤地金襴御戸帳、半鐘等は今も猶ほ神社の什寶として現存してあり  
ますが、此等勿體なき品々は皆な寛永寺法親王の宮より賜はりしものを了翁は、愛郷  
の念、敬神の誠を表するために郷土の誇りとして持ち來られたものであります。

十八歳の時、了翁は再び知識を江湖に訪ふべく幡野を出られました、旅の途すがら  
羽前の米澤に立寄りまして、有名なる文珠堂に詣り、福徳智慧を授けたまへと懇ろに  
禱りましたのです、かくて青葉城下に入れば仙臺侯の御威光も何んのその、竹に雀の  
雲水日和、雲の峰立つ金華山を眺めつゝ、松島の松濤に掉さして、瑞巖寺の鐘に錫を  
停めました、是れ彼の雲居禪師に拜問せんがためであります、雲居禪師といふは、後  
水尾天皇の御寵信を蒙りし程の大善知識で、屢々宮中に入りて法要を説かれ、勅を受  
けて妙心寺に住持せられましたたが、曾て諸方遊歴の時、伊達忠宗の強請に依りて瑞巖  
寺を再興せられました。大悲圓滿國師と勅諡せられた方ですから、其の徳風を望んで  
集まる雲衲や霞袂に法花爛熳の春を開いて居つたのであります、了翁は親しく雲居  
禪師の鉗鎚を蒙りまして密かに臨濟の宗旨を聴くことを得ました、兼て五戒をも授か  
りて法喜禪悅の氣分を味ふたのであります。

慶安二年、了翁が二十歳の折柄、參師問法の精進、一日一夜の怠りもなかりしが、

佛法の大海いよく入れば、いよく深く、三寶の實歸なかく汲み乾すべくもあり

ませんです、忽ち禪の端的たる祖師西來の意に就いて疑を發しました、達磨若し東土に來らず、二祖或は西天に行かぬとするも、直指人心ならば見性成佛せねばならぬ筈にあらすやと朝思暮想の淵に浮き沈みすること月餘、此の疑團を解決せんと欲して罵風呵雨、去つて郷國の山河を踏みました、先づ藩侯の菩提所たる天徳寺に登つたのであります、當時天徳寺を董し居たる檢外鑑察和尚は天下の宗師家でありまして參禪の學人常に百餘を養ふて居りました、了翁は焼香禮拜直ちに禪要を叩いたので、「如何なるか是れ祖師西來の意」了翁が上段の構えにて斬り込みますと和尚もさるもの靜かに「庭前の柏樹子」と窓外を指されました、了翁が若し天徳和尚の答處に向つて見得して親切ならば前に釋迦なく後に彌勒なしといふ活作用を現することが出來たらんも、水到りて築未だ成らざりし了翁は、言、事を展ぶることなく、語、機にも投せず愈々天徳和尚の句頭に迷ふたのであります、そこで了翁は更に錫を轉じて關東の佛

法を探りました、日本八宗の佛風は悉く江戸を中心として北へ東へと擴まりました、關三刹なる録所の威權は法輪を轉回せしめました、殊に禪の如きは到る處、商量浩浩地、華を攢め錦を簇らしめて居つたから、南北西國の禪僧は一たび笈を負ふて關東の叢席を経なければ湖南無舌の解語を知らぬ徒弟僧なりと輕蔑視せらるゝ様であるから、了翁も亦た風に別調に吹かれて、洞宗の韃輔、中興の選佛場なりと稱せられし上州白井郷なる雙林禪寺に寓することに致しました、雙林寺は大叢林で開山月江禪師の家風綿々として熾んに、會下の僧は二三百員を缺かぬといふ有様です、のみならず境致の勝絶なること全國第一の誇りを持って居る位、山勢水色、樓景塔影、謂ゆる人境俱に不奪の精舎であるから、了翁頗る得意でありました、茲に於ても了翁は例の刻苦修練の荒行を試みまして、一夜必ず三千五百拜を禮することを佛天に誓ふや偶々病むことありと雖も懈ることがありません、又、寺の背後の山上に諏訪明神祠が有りまして、昔から衆魔の巢窟であるとして人々が怖れて居るといふことを聞いて、了翁は特

に其祠に籠り、火食を断て神に祈ること凡そ百餘日に及びました、或朝、鴉の啼く聲を聞き、頻りに郷里の家父が老いて且つ貧しきことを想起し、取敢えず禪定より出で、江戸の城下に到りました、嗚呼、我や了翁、三界の衆生を救はんがために家を出で親を捨つるも、流石に恩愛の情は断することができぬ、我を生むものは父母、我を育むものは父母なり、昊天極り罔し、何を以て其徳に報んや、天下儒を以て孝と爲して佛を以て孝と爲さず、誤れるものよ、佛の孝は小孝にあらで大孝なりとす、我が本師釋尊が、始めて教を振ふや即ち謂ふ、孝を名けて戒となすと蓋し孝を以て大戒の端的となすのであらう、佛の道は徳を以て之に報すべく、素より扶養必ずしも父母に報するに足ぬらとするも、凡そ爲すこと有るものは生きんとするより旺んなることはあるまじ、我れ父母を資くるに生を以てせねば、前途長くもあらぬ老父に對して孝道が立たぬ、曹溪の高祖慧能禪師も始め薪を鬻いで其母を養ひたりと聞けり、而も發心修行せんとするや慧能禪師が家に在らねば誰も母を扶持してくれる人なきことを患ふるの

餘り、毎日市中に雇はれて其の勞働賃を儲められた、三界に流轉する佛も衆生も同じ涙腺に湛ふる潤ひは無爲の境涯に入るとも思は棄てられぬものよ、我れ了翁が未だ機縁熟せぬ悲しさは、道を以て父に見えることを得ざるも、葉落ちて根に歸す、父や我を待つ給ふらん、道不禪師すら世の亂に會ひし時、墨染の法衣に母を負ふて華陰の山に逃がれ、食を近里に乞ふて母を養ひぬ、その父が戦に死したりと聞いて道不禪師は血腥き戰場に行き、累々たる死屍の中より遺骸を求め探すこと數日、風吹けば草伏する野の夕暮、尾花荳莢繁き處、忽ち一顆の燭燄ありて不思議や禪師の前に躍り出でぬ見れば我が父の亡骸なりしといふ感應道交する時その孝や全うするもの乎、古聖の遺芳なほ後生の襟に匂ふ、我も今日よりは慈悲と孝順の道を盡さねばならぬと慨然たりし了翁は、或は托鉢し、或は筆耕し、或は他家より傭はれて水を汲み、或は米搗き男となりて春を踏むやら、備さに額の汗、腕の力を出して骨身を碎きました、金數枚を貯ひ得たる了翁はいそぐと急ぐ東山道百五十里を杜鵑啼く頃、郷里に戻りまして是

を老父に奉れば、父の喜び一方ならず、緑の蔭、茅屋の夕べ、父子手を握りての和氣霽々、遣りたくもなし、去りたくもなき親しみも、さりとして家庭にいつまでも在るべき身にあらざれば、復たの逢ふ日を契りて了翁は再び遊方の途に就きました。

承應元年となれば、了翁既に二十三歳となりました。向上の志氣は頭燃を救ふが如く、求道の精進、正さにその高潮に達したる時も時なり、同參の友、道伴和尚が來り告げて曰ふ、頃ろ大清の善知識隱元禪師といふが本朝の請に應じて我國に來らるゝとの事、實に千載の一遇ならずやと相俱に喜びました、抑々應仁以來、天下大に亂れ、文教また頽廢して僅かに五山文學の名のみ残りしました、臨濟、曹洞共に二三の大徳なきにあらざりしも、明極禪師以後は支那高僧の西來殆んど跡を絶つ様になりまして、桃源夢裡、叢林の風規も頗る荒みましたが、此頃に至りてから、當時、明末の騷亂を避けて我邦に來り、商賈などを營める者多く長崎に集合しまして、隱然たる海西の一居留地を劃して居りました、彼等居留民はこの長崎を墳墓の地と定め、崇福寺、興福

寺、福濟寺等の寺院を建立して、常に本國から禪僧を迎へ來りて住持たらしめて居つたから、這邊さながら支那風の禪的情調を漂はして居りました、然るに斯の際、四百餘州を風靡せし程の禪門の權威者たる隱元禪師が渡來するといふは實に空谷の跫音も雷ならず、天下の耳目を故たしめたのであります。

隱元、諱は隆琦と申しまして、明の福清の人であります、姓は林氏、父は徳龍、母は龔氏と申す、神宗の萬曆二十年十一月四日に生れました、六歳の頃父なる人、客遊して學に就くことができませぬ、九歳の時、甫めて字を習ひましたが、家甚だ貧くて書籍を購ふことさへもできませぬから、翌年の冬からは學を廢て、全く田を耕したり山に樵りなどして母を養ふて居りました、十六歳の頃、或る靜かなる夜、星流の輝く蒼天を仰ぎ望んで天文の神祕に感ずる所がありました、乃ち佛道を求むる様になりました、二十歳の折、母は掃帚の勞を取らすべく嫁を迎ふる事を勧めても堅く辭して止みました、それより戀しき父を尋ぬる念が止み難く、風餐露宿、天下を遍歴して父を

捜すこと三年に及びましたが其の蹤跡さへも判りませんでした。或日、南海の普陀山に至りて觀世音を拜み父に逢ふ様にと願を掛け、終に此に止まりて茶頭となりました其後、母を故郷に省み、同じく佛に歸依せしめました。恭昌元年黄檗鑑源禪師に就いて剃髮得度せられました。是より精勵刻苦、江湖を跋渉して禪要を究盡なされ、尋いで金粟山密雲和尚にあること六年、雲集せる龍衆萬餘の中に隱元は其巨擘なりと稱せられました。去て獅子巖に住したが費隱和尚が黄檗山に主たるに及び擧げられて西堂職になりました。臨濟の正傳を得て遂に黄檗山の席を継ぎました。前後の住山十七年、到る處、德望熾んで禪風大に宣揚せられたのであります。無得、慧門、也嬾、木菴、虛白、即非等の英傑は皆その門下より打出されました。

了翁がその半生に於ける數奇なる運命のそれが、我にも似通ふ點尠からざる隱元禪師を夙に共鳴し自鳴して遙かに敬慕渴仰しつゝありしが、今その隱元が興福寺逸然和尚等が一回二回三四回までも懇懇に書帛を捧げ禮を厚くして東渡を請ふて止まざれば

黄檗山を嗣慧門に譲りまして、我國に來朝するといふ事になつたのであります。隱元時に年六十三歳まことに法を傳へて迷情を救はんとの道心の外、何事も望みはありません。せんでしたらう、雲山萬里を隔てたるも眞の知己、眞の善知識を迎へんとして了翁は旅装も匆々、友なる道伴和尚と携へて備前まで抵りました。此の道伴といふは鐵心と號し、肥前石馬郡の人であります。幼にして出家せられ、四方を行脚して木菴に依りました。後ち長崎に萬壽山聖福寺を創建して開山とされました。語録、詩文集等も残つて居りますが了翁とは莫逆の親しみがあつた様であります。

然るに隱元の着陸も何日頃となるやら中々定らぬので國清寺に僑居して待ちましたかくて廿四歳の春となりましたが隱元の消息は未だ判明せぬので、寸陰空しく過ごすに勿體なく、備後に參りました。仁山和尚の會下に滞在して禪旨を請益せられました。承應三年の夏、了翁が廿五歳になつた時、隱元の來着もやがて近きに在らんとする事を知りて雀躍して長崎に行きました。茫々たる雲、渺々たる海、日の入る方を遠く眺

むれば水天を楔するが如き一葉の舟、帆影が見える、楫歌が聞ゆる、そうして人の顔も見ゆる様になると、了翁は道伴と一緒に、岸へ上り磯を傳はり、巖に攀ちて兩手を翳さして喜んだ、招ぐ、呼ぶ、叫ぶ、夢中になりて了翁は駆け廻りました、七月六日隱元の坐せる摩訶般若の船は海路恙なく港に入りますと、即日、了翁は隱元禪師を興福寺の寓居に拜謁して、隱元の足を頂いて禮する様恰も窮子の其父に遇へるが如き喜びでありました、了翁は親しく隱元の座邊に侍して給待して居ります中に、病氣に罹りました、醫藥も驗しあらぬ様であるから、隱元に暫くの暇を乞ふて佐賀の城畔に退き、方外の友士の家に滞在して保養せられました、然るに隱元の開法以來、道俗の歸仰日を迫ふて加り、曹洞の鐵心、獨本、臨濟の獨照及鐵牛、鐵眼、潮音の諸學僧も門下に教を受るといふ有様で、道聲遠近に傳はる程に、長崎の奉行は是の僧、支那の間牒者に非らずやと疑ふて京師に上ることを抑留するに至りました、そこで了翁は當時妙心寺にありて後水尾上皇の歸崇いと厚き龍溪性潜和尚に隱元の語録を示し且つ

其の至高至大なる人格者たることを説きて、其冤を雪ぎ、頑迷なる奉行等を説得せらる、様に取なしたれば、龍溪和尚も忽ち隱元の中瓶に侍する事になり、それを縁りとして上皇も亦た隱元に歸依し給ふに至りました、曾て上皇が禪旨を勸問せられ給ふに隱元奏對して申すには、

單傳の法、直指の道、別に言語なし、唯た身心を放下し、無位の真人を觀破して、自徹自悟して後、已まんことを要す、既に徹悟し了らば、生死去來、自由自在、富貴に處しても富貴の爲めに羅籠せられず、人天に處しても人天の爲めに留礙せられず、謂つべし、能く萬象の主となり、而も四生の父と作る、と、  
上皇敬感斜めならず、佛舍利並に御香を賜ひ且つ金若干を下して山内に舍利殿を建立せしめ給ひました。

明暦元年、了翁は廿六歳になりましたが往來蒲柳の質、それに多年の苦行が崇りをなして、宿痾中々癒へず、日増しに羸瘦する様になりたれば、現在善知識に逢ふて學

ぶこと能はぬ事を悲しみつゝ、無念の涙を呑みて江戸に回りました、病床三尺を我休む天地として焦心苦慮すれども起つべくもあらず、死して祖山にあらば骨も亦た清からんが、斯くて眼光落地せば本願遂に空しかるべしと再び病軀を提げて故國に歸り、老父を省勤したのは了翁もはや廿七歳の時でした。

烟療霞養、暢然と老父の膝下に在りて厚き看護を蒙れども、更に其甲斐もなし、九死に一縷の望みを繋いで香を炷き肝を瀝で佛天の加被を祈り、土地神の擁護を禱るのみでありましたが、神も佛も猶ほ斯の熱烈なる願力に生命を延ばし給ふて稍々輕快の色も浮び、やがて起つこともできる様になりました、此の時隱元は攝州の普門寺にありて化益旺んなりといふを聞いて矢も楯も堪らず、我慢の呼吸を喘ませて再び訪ふて行かれました、廿八歳より數年間の了翁は最も求法の念熾んなりし時代で、影の形に随ふが如く一日たりとも隱元の左右を離れず常侍した様であります、見地も進み禪機も熟して天晴の龍象となつたのでありませう。

(三)

通譯の舌頭によりて宣傳せらるゝ隱元の片言隻語は嶄新奇抜なる新福音と響いて、攝州より江戸に之き、萬治元年十一月には將軍家綱に謁するといふ様になりました、寵遇頗る非常でありました、家綱は地を山城國宇治に賜れば、隱元は龍溪等と謀りて、寺基を開き寛文元年八月工事竣功し、號して黄檗山萬福寺と名けました、了翁此時三十二歳血氣絶倫にして粉骨碎身、備さに犬馬の勞に服しました、これより先、隱元の高足なる即非和尚が曇瑞等を随へて東航し長崎の崇福寺にありて安居するを聞き遙かに之を訪ねて遠來の旅情を慰めました、又親しく單傳の直指如何と問着せられました、此の即非といふは諱は如一と申します、夙に隱元の印可を受け、寛文三年宇治に入りて隱元と邂逅し、即ち黄檗山裏の竹林寺に留り、木菴と共に隱元の法化を補佐しました、後に豊前の太守小倉侯に請せられて同地に福聚寺を創めて開祖となりました



た、晩年再び長崎の崇福寺に退去して宗風を擧揚せられました、柏巖、千呆等はその門嗣であります。

三十三歳の頃了翁は自己の病弱にして、動もすれば學道の志氣を阻喪することあるを慨き、佛天の加護力を仰ぎました、日課として十萬八千佛を禮拜するの傍ら、至心に梵網、戒經を專修すること百餘日、或時、病は感業を源とするもの若し人間にして惑ふことなくば病苦あることなしとの天啓を體驗せられました、我の身命を惜むは佛祖のおんいのちを相續せんがために外ならず、菩薩の行業たる應さに慈悲と孝順の心を生じて、一切衆生を救はんがため、衆生に佛智見を開かしめんがため、衆生をして安樂ならしめんがため、此の人間世界に出現なされたものであれば、我が病弱は過去の罪障の報えならん、今日より後は、我が生きんとする努力心、新たならんとする希望欲を回向して普く是を一切に施さねばならぬ、慈悲心を以ての故に放生の業を行すべきである、一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我れ生生に

之に従ひ生を受けずといふことはない、故に六道の衆生は皆是れ我が父母ならん、而るを殺し、之を食ふ、我は我が父母を食ひ、我が故の身を殺すも同理なれば、我が身の病弱を救はんはんと欲せば、光と熱との下に生きんとするもの延びんとする一切の生類をば生々に生を受けしむる様にせねば出家の道は顯はれぬ、況んや凡夫痴闇の我れ了翁は心猿時に五欲の枝に飛び移り、意馬或は六塵の境に馳らんとする、愛欲の源を断ち除かねば情けの露に靡く柳の芽ぐむ男の性、邪魔物よ如かずくと刀を乗て其勢を截去つたのであります、素人の手術なれば鮮血淋漓として流れ、疵の痕さへ中々痛みが止まぬ故、剛氣の了翁も有馬の温泉に行きて浴療いたしました、此の有馬温泉は遠き神代の發見にかゝり建久二年仁西上人が中興したもので、三方山を廻らし、瀧川武庫川の清流に沿ふて風光明媚、土地頗る高燥で海拔一千一百五十五尺といふ、四十八瀬の奇勝もありて太閤秀吉が之を修補したものであります、鼓ヶ瀧、落葉山の夕照温泉寺晚鐘、巧地山秋月、有馬富士の暮雪、有明樓の春望などの八景もあります、

了翁は此の温泉には度々來りて沐浴し、身心の垢を拭ふたもので後年、本師なる高泉禪師とも隨伴して湯治致した様であります、高泉禪師の靈筆になれる『有馬温泉記』の如きは當時騷客の間に喧傳せられたる名著で有馬の温泉をして今日の隆盛を招かしたる第一の紹介者であります。

湯治の効驗ありて身體も健康になりし三十四歳の春、了翁は得々として黄檗山に上りました、一夜孤燈の下、形影相憐むが如き我が身を悲しみ、嘆息して云ふには、癸卯の龍次は即ち唐の義淨三藏が印度から經卷を滿載して還へられた則天の證聖元年である、山海遠く、歲月隔たると雖も我も亦た佛經流布をもて誓願とするものである、弘法の念は乃ち我れ了翁と彼れ義淨と一致する、生死事大、無常迅速、奮はずんばあらずと反省せられました、義淨三藏は支那齊州の人で能く梵語に達し、玄奘、實叉難陀、菩提流支、不空と併稱せらるゝ唐代の大翻譯家であります、夙に法顯や玄奘の道風を追慕して、是非一たびは印度に行き、親しく釋尊の芳蹟を巡拜して死にたい

と志を立て、三十七歳の時、同志の者十數人ほどを得て航海萬里幻身を波濤に任せ、今の廣東から船で出發しましたが、風波の險惡なるに怖れて途中で同志は皆還つてしまひ、遂に唯つた義淨が一人になつてしまつたが、不惜身命の願力は龍魚もろもろの危難もなく印度に達し、周游二十年、錫を全國に飛ばして法を求め道を傳へました、則天の證聖元年に支那へ歸り、一度『華嚴』の譯場に列したけれども、後には東都の大福先寺、西都の西明寺等で翻譯をなし、殊に翻譯院を建て、之に居らしめらるゝ様になりました、賚らす所の梵本は四百部、五十萬頌程で、其の翻譯したのが六十部二百三十九卷であると『開元錄』に記してあります、即ち『金光明最勝王經』十卷を初めとし、『能斷金剛般若波羅密經』一卷、或は『大孔雀王咒經』一卷、『佛頂尊勝陀羅尼經』一卷の様な密部のものがあるかと思へば、『因明正理門論』二卷、『觀所緣論釋』一卷、『取因假設論』一卷の様な因明や法相宗に關したるものもあり、又特に大部のものには有部律に關したるものが多いので、例へば『根本說有部毗那耶』五十卷、

『根本説有部苾芻尼毗奈耶』二十卷『根本説一切有部毗奈耶雜事』四十卷『根本薩婆多部毗奈耶陀那目得迦』十卷『根本薩婆多部律攝』二十卷等の如き是れであります、了翁は其の義淨が大根氣に感激したのみならず、曾て愛讀したる義淨の著書で有名な『南海寄歸傳』四卷『大唐西域求法高僧傳』によりて古聖先德が殉教の精神の熱烈さに自己の琴線を止めどもなく振るはして鳴つて居つたのであります、是に於て了翁は直ちに攝州の勝尾、和泉の長谷、洛湯の清水なる三所に參詣し、印度の波羅門が修する苦行に慣ふて斷食祈願を試み、佛の示す給ふ如く犠牲の表示として自己の指頭に香を焚いて觀音救世の妙智力を乞ひました、それから更に伊勢大廟、多賀明神に謁で、祝して云く、我れ了翁根劣にして病多く、倘し今生に於て弘經の誓願遂ぐることは、すんば、願くは則ち索性に速かに死して再來其の夙志を償て可ならんのみと神徳を仰いだのであります。

三十五歳の春よりぞ人生の蹉跎たるを知る世路の難、喜び勇んで了翁は弘經事業に

着手すべく、化を四方に募らんと黄檗山を下りました、無理に焚きし指頭の焦痕は潰れて爛れて、痛苦忍び難きも、皆是れ罪障の致す所なるべしと自ら恨みつゝ、行々諸國を巡りました、三輪の旅人宿、奈良の茶屋、摺れ合ふ袖も他生の縁と説けば、知るも知らぬも了翁の誠意に動かされて誰も彼も淨財を喜捨しました、然るに江府に入りし頃はまた一痛疾が起きまして、身の動きも自由ならねば、道の了翁も弘願遂に就らざるかと嘆きつゝ、豫て歸依を得たる松平孝石といふ篤信の居士の宅に留まりて、暫く保養する事となりました、相變らず了翁の意氣は強く、ひたすら觀世音菩薩の救ひを求めました處、旅に病みて夢は枯野をかけめぐる枕頭に一人の老人が現はれて告げらるゝ様、爾が發す所の願心最も希有なりとす、我常に爾を護りて須臾も離れず、爾の病弱を憐みて附するに藥方を以てせむ、爾、但此を用ひよ指痛必ず癒えて心強く身健かならんと、了翁驚いて其名を問へば吾は是れ長崎興福寺の如定なりといふ、嗚呼、夢か、神か、如定か、了翁年來、佛や神の加護を祈ること至れり盡せり、目に

見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なるべし、人即ち神の福音が今明かに了翁の生命に現はれて、我は日本の神々を父として、三世の諸佛を母として、此に合一することの保證を興へられたのであらう、我等の信する佛達は寂光の淨土を此の國土に現はしてくれるのも遠くはあるまい、我は罪障深き凡夫であると今の今まで、痛み嘆いたが日頃難有思ふ觀世音が如定といふ其の如實の正覺身を現はして、我の心に住るといふ事、夢といふも事實である。矛盾の様なれども藥方は慥かに記憶に残つてある、我正にこの藥方によりて『藥』を調劑して廣く世間の人々の生命に體得せしめるのが、活きたる佛教の事業であらうが我は今、神のお告によりて自分の精神に此の神祕的合一を體得した、夢中の状態が覺めたる現在の内面生活に現せば、即ち純乎たる眞の『信』と名くるのであらねばならぬ、親の慈悲や、子の孝順や、友情や戀無常の愛や、人間に於ける信頼など各々其の動機を異にしても結局はこの『信』を基調として現はるゝ人格の融合、精神の交感となるべきもので、此に是法が平等となりて差別の世界が

なくなる筈である、治生も産業も正法に順ずるとの佛の教は、此に於てその意義を生ずる、我れ了翁は從來『信』を獲べくあまりに迂遠であつた、西來の祖師意が庭前の柏樹子であると教へられても、餘りにこの『信』を遠大に考へて、理想に近づける方法を知らなかつた。

或は禪定の床の上に坐して王三昧に入つたり、名號を唱へてみたりしたが、佛智に合一もせず、光明に攝取せられもせず半生を過した、天地山川の壯麗なる自然の風光は、まことや神の智慧、佛の慈悲であるのだ、松吹く風は度生の聲と聞きしは昨日の我、柳は染むる觀音の妙相と拜むは今日の了翁、使命輕からずと蒲團を蹴て乃ち威儀を具し、西に向ひ恭しく旃檀を焚いて遙かに禮しました、翌日、夢の教ふる儘に藥を製して之を用ゆるに果して効驗神の如く現はれましたから、元氣回復、即ち化を募りて諸方に及ばんとせしに、何事ぞ、根疵の腫は復び痛みまする、今は是れまでなりと觀念の眼を閉づれば、悔恨の淚徒らに襟を濡らすばかりでありました、朝懺暮

悔、ある夜、不思議や復た夢に入る、前の老人と覺ぼしきもの聲あけて『了公了公』  
 必ずしも憂ふること勿れ、佛天及び神明は日夕爾を護る、正に宜しく精進すべきのみ  
 痛處を治さんと欲せば則ち當さに前に授くる所の薬方に、更に先聖不傳の一味を加ふ  
 れば大に可なり、即ち携へ來れる錦袋を拂ふて薬を示して云ふ様、此は是れ萬能丸な  
 りとす、師仰いて之を頂き接して之を視れば則ち前年授かる所のものなり、醒むるに  
 及び熟々その薬方を諳んするに、昔、加州に在りし日、自得居士の傳ふる所の薬方と  
 少も異ならざれば奇異の想ひに勝へず、夢中か覺中か、もとより共に一如なり、實相  
 なり、凡聖とも夢中説夢なりと聞けば、了翁や昨日にても生すべし、今日にても長ず  
 べし、佛を見、神を見る皆な夢の菩提なるべし、覺めたる我の徧界はみな不味の因果  
 にして轉た風流なりと、時を移さず夢中に承けし教の通り一味を加へて之を傳るに疼  
 痛立どころに除きたれば、了翁の歡喜頗る非常にて、如何にもして此靈薬を施して我  
 等と同病同苦に泣く、世の多くの人々のために利益せしめば我が願も成就するならん

と決心し、遂に江都に到りてこの薬を傳授せんと思ひました、特に淺草の觀音大士に  
 詣りまして薬名を定めんと要し、試みに『萬能』と『錦袋』との二名を書いて闍を拈す  
 ること三度すれば皆な錦袋といふを得ましたから、因つて薬を『錦袋圓』と名けました  
 (この如定といふは、寛永九年來朝して興福寺に住し、) 了翁が三十六歳の夏、江戸を振出しに、  
 關東地方を勸化しましたが、名もなき旅の一寒僧、露置かぬ方もなき程、大空を笠に  
 頂いて行きました、武藏の平野、濡れて宿借るゝ夕立の家、誰一人として了翁の願力  
 を承當する者なければ、末法の人々が恵みの袖に絶るよりは、自立自營、むしろ錦袋  
 圓を賣藥の業となして、購經の資本を得るのが第一の方便策、光陰箭よりも迅く、我  
 身は風前の燈火の如し、山よりも高く積む大願を果すとならば、世の人々に輕賤せら  
 るゝとも憚る所にあらず、と臍を据えました、我意のある所を人に語りしに、その人  
 頑迷で了翁を諒解してくれず、のみならず、志願は好きも未だ佛の我等出家に販賣買  
 易の商業を許すといふことを聞かぬとて、反對に意見せられました、偶々知己の居士

松平孝石が之の事を傳聞して頗る隨喜せられ特に了翁を訪ね來りて激勵せられました居士の云ふには、大乘佛教の極致は身心一如と説く、故に人の靈を救ふと共に肉をも救はねばならぬ、菩薩が社會のため人類のために感化救濟の事業を實現する爲めに夙に八福田の功德を説き給ふにあらずや、福田といふは人類の幸福を植付けて育てる所の田地であると申す意味で、第一は曠路義井といふて、交通の便を謀り、旅する人の難義を救ふために井戸を路上に掘つてくれる、第二は建造橋梁といふて、河や水に橋を架けて往來に便利する、第三は治平險隘といふて、道の惡い所を平らにしてくれる、第四は給事病人といふて、即ち鰥寡孤獨の者や廢疾の人々等を救濟する、第五は救濟貧窮といふて昔の悲田院や施藥院の仕事であつて、今の養育院の様なもの、第六は孝養父母で、人倫上の實賤問題であります、第七は、恭敬三寶であるから佛家の一大事、第八は、設無遮會といふて大慈悲心の實現たる平等法界の理想郷であらう出家の菩薩を以て任ずる以上は、内に菩薩の行を秘しても、外に聲聞の形を現じて

社會、國家のために奉仕生活をせねばならぬものである、聖徳太子の療病院や施藥院は皆肉を救ふ方法で、敬田院といふは即ち靈を救ふの道を説かれたものである、試みに日本に於ける高僧傳を調べて見ると、感化や救濟といふ方面に活動したる社會問題の解決者が澤山ありまして、弘法大師、傳教大師、行基菩薩といふ様な先賢は申すに及ばず、忍性律師の救貧事業、叡尊律師の慈善施行、嚴真律師が免囚保護の如き、道昭法師の義井を掘り橋を架けたり、道昌僧正の開墾に従事したり、豊然法師が石油發鑿の業を企てたり、道元禪師が陶器製造や調藥業や製茶の事を其の門人に學ばしめたり致しましたのは、皆是れ法華經の趣意に依る菩薩業で、國民生活の安定が、やがて、正法實相の功德となるものであるから、菩薩が種々の身を種々に現じて、種々の衆生を濟度せられたるものである、豈に世人が區々の批評を意とするに足るべきや、と言々肺腑より湧く孝石居士に警策せられたる了翁は、大死一番茲に活機輪を轉ずることになりました。

第二義門を建立せんとしたる了翁は、江戸の東叡山の麓なる不忍池の畔に藥舖を開き、錦袋圓を賣ることに計畫致し俗姪をして之の事業を監督せしめました、所が、藥の評判頗る好く、買ふもの市をなして集まり、錦袋圓の名は忽ち江湖に噴々たる様になり、婚錢湧くこと泉の如く、了翁の財布も亦た暖かになりました、今日も下谷區池の端に錦袋圓の看板を掲げてある賣藥店芝大助といふは、了翁の血族の子孫であります、江戸文學の小説本や、今日の講談本の中に時々『降る春雨を厭ふにもあらで相合傘、錦袋圓の路次をぶら〜通る』などといふ文句を見うけますが、錦袋圓といふ名の人口に膾炙したことが推察せられます。

(四)

かくて了翁が四十一歳になりし頃、剩餘金を積むこと既に三千圓以上でありましたが、其内三百金を投じて先づ林氏孝宿善士が印造する所の官板の大藏經七千巻を購ひ

ました、當時徳川の天下全盛の時代で、葵紋所の御威光が上下に徹したる頃でありまして、國の大黒柱として崇敬を擅らにせし、『黒衣の宰相』たる天海僧王が飛ぶ鳥をも落さんばかりの世の中でありました、徳川氏は治世の手段として文學を盛んにし、佛敎をも宣傳せられました、戦亂に疲れ果てたる國民の間に、文學、宗敎の力を藉りて中正穩健の精神を鼓吹せんと欲し、偉人天海を拔擢して之を幕府の顧問とし、親しく樞機に參與せしめられました、天海は會津の蘆名修理太夫盛高の一族でありますが風度英發、舉止嚴正、常人に超ゆる所あり、天台の深奥を極め、三論、法相の妙理をも究めて、才氣縦横、夙に家康の信賴を受けて、その帷幄に參じて居りました、後陽成上皇の御飯向も一方ならず遂に家康は弓箭の棟梁、源家の名士なり、天海は佛家の棟梁天台の高祖なりとの宸翰をたまふに至りました程で、日光山を築いて其の主となり、『江戸の詰の丸』なりと稱せられました、晩年、寛永寺を建立したが、寛永十四年には大藏經の版行に

着手したのでありますが、業半ばにして示寂せられました。そのまゝになつてありしものが此の大藏經であります。了翁は即ち天海僧正の遺志を繼いで、一國に一部を鎮め六十六州に六十六部の大藏經を置いて、以て天下國家の太平を祝せんと欲しました。先づ斯の大藏經一部を東叡山に鎮置せんと願ひまして、之の儀を日光法親王に稟し、すれば法親王も了翁の志に感じ直ちにお許すになりました。是に於て了翁は不忍池中に於て小島を築かんと欲し、一曳石、二搬土、土木の工事を營みまして、磊石を疊みて壇を作り樹を植て風致を添へ、茲に忽ち小蓬萊を現出しました。此の不忍池は上野臺と本郷臺との間にあり、周圍十二町餘、藍染川、根津より來りて之に注ぎ、餘水は溝水と合して下谷三味線堀に到る、之を忍川といふ、池の南西二方を池の端と呼びます。此池往古は廣大なるものにて、神田川、淺草荒川と相通じ、一面の沼澤なりしと聞く、昔から蓮の名所にして、雪の景も甚だ佳なるもので、春は香雲鬢鬢たる處、槍の行列、薙刀の行列、柳、櫻の畔を練る大名小名の供衆揃え、蛙々鳴く蛙、加賀様の

御通りで、雨滴々聲の如き蛙も聲歇むといふ威張方であつたのです。

了翁先づ小閣を草創して大藏經を安置し、結縁衆生のためとして特に辯才天を勸請して祠を建てました。鐘は上野か、淺草か、爾來幾百春秋、月にも花にも都の人が杖を曳く江戸の名所となりまして、足一たび東京を踏むものは必ず今の辯天堂に詣らぬ人としてはありませぬ、これが了翁の發願經營になりしものであります。

この年、了翁は去つて、京都に參りまして、東福寺に謁し、常樂の聖一國師の眞前を拜み、普門寺に寓居し座元の職に充てられました。變現出沒寸時もやまぬ勇猛心は席暖かなるに暇ありません。この時初めて了然といふを改めて了翁と號されたのであります。

了翁が不忍池中に就いて、經堂を構えたのは元來、火災を防ぐためでありましたが、濕氣が強いので經帙が傷らるゝもの多く卷軸苔を生ずる有様ですから、了翁四十二歳の時、池の上に乾燥な地を選んで經堂を改造致しました。輪奐頗る見るべきもので



當時の人心を驚かしました、更に經藏の倉庫兩棟を建て、内外の經典、本朝有ゆる所の書籍を集めまして、一大圖書館を造りました、江湖講學の者を自由に閱覽する様に便宜を與へたのであります、經堂の中には如定が曾て、唐より持ち來れる三聖の銅像を安置して長く學道の守護神と仰がしめました、此に於て了翁が年來希望したる納經の弘願その一分が美事に畢りましたから、佛恩神徳を報賽せんと欲して特に伊勢の國に到り、上野といふ所の安養寺の門前に施藥館を建立し、東から、西から往來する群衆に對して藥を施しました、復た洛陽の泉涌寺、萬福寺の門前に就いて、親しく施藥すること五萬五千餘包であるさうです、了翁が四十三歳となりし頃は池上に建立したる所の經庫等總て竣功したる時、即ち寛文十二年大地震のために大概破壊しました、別に憂ひを顔色に現はさなかつたのです、然るに世間の波が悪く、景氣も非常に衰微して、失職無業のもの多く、貧乏人などは其の小兒を街頭に棄てたり、山野に投げたりするものがありましたから、孤兒より出でし自己の生立に泣き、世味の辛さを

嘗め暮らしたる了翁は斯等の棄兒、遺兒が悲惨の境地を見て、棄てるもの、棄てらるゝものを我身に比較して、满腔の同情を濺ぎ五六十名を拾ひ來て之を養育する様になりました、袖裏の乾坤、大慈悲の雨露に蘇生せし可憐の小兒が群がり、嬉々として遊戯するを眺め是れを唯一の娛みとして了翁は精々藥を賣ることを勵みました。

延寶元年、了翁も四十四歳となりました、既に經藏建立の事業も出來て、一般世間の教化機關とすることを得たから、更に自己慧命の相續として、専門道場たる僧侶の勸學寮を建て、かくて法門無量の誓願を達せしめんと欲しました、内外の經典を六凡に覽せしめんとする了翁は社會奉仕の精神にて、常に淨縁を四聖に結ばしめんとする自己奉仕の行持でありました。

了翁四十五歳の時、又、發願して、大藏經一部つゝを台密禪三宗の道場に鎮置せんことを計畫しました。

當時、黄葉の禪風は關西より漸く關東に吹き來り、江戸の瑞聖寺を其根據地として

旺んに法輪が轉せられました、瑞聖寺は隱元の高足たる木菴禪師の開く所であり、  
 木菴、諱は性瑠、姓は吳氏で、支那泉州晋江の人、五歳にして父母に別れ、祖母蘇氏  
 に撫育せられました、崇禎二年、十九歳の時、開元寺の印明を禮して得度し、鼓山の  
 永覺より具足戒を受け、初めて宗門に佛向上の事あることを知り、屢々兵禍  
 に罹りたるも學業を廢せず、抗州の接待寺に抵り雪關に見えて教を受け、尋で天童山  
 に登りて密雲に參禪し、親しく痛棒を喫しました、後再び永覺に謁し辛鍛苦修、一夜  
 燈火の影動くを見て豁然大悟せられました、更に費隱に謁してその膝下に副寺として  
 勤めました、順治五年、黃檗山に登りて隱元に參得せられ其の首座となられました、  
 黃檗の佛法漏らさず掬し得て、源泉を探りました、家風凜烈、支那の宗權を左右する  
 程でありましたが、順治十二年六月、我國の請に應じ師隱元の影を慕ふて來朝せられ  
 たのであります、時に我朝の明暦元年でありました、寛文元年山城の黃檗山に至り  
 四年九月、黃檗山の法席を繼がれました、隱元の信頼、最も渥く衆望を負ふて法雷を起

されました、明暦五年同門なる鐵牛和尚の請に依りて三壇戒場を開きました、受戒  
 登壇するもの五千餘人ありしと云へば、其の聲譽おさく、隱元にも劣らぬ程でありま  
 す、同七年江戸に入りまして綱吉將軍に謁を許され、大に優遇を蒙り特に幕府より宇  
 治の萬福寺に山林田園の朱印を拜領せられ、金二萬兩をも寄附せられましたから天人  
 師殿、佛殿等を造營しまして輪奐の美を増しました、同十年勅して紫衣を賜はりました  
 た、黃檗山は之より益々振興する様になりました、木菴は再び江戸に下りまして紫雲  
 山に瑞聖寺を創めその開山となられました、木菴の叩く支那的木鐸の響は天下に傳は  
 り、夢中に過ぎし徳川佛教史上の覺醒者は續々として其の法幢下に集りました、諸來  
 の龍象駢び臻る大禪林となつたのであります、延寶二年即ち了翁が四十五歳の時、木  
 菴は瑞聖寺の法席を鐵牛に譲りて黃檗山裡に退休せられましたので、此時、鐵牛和尚  
 の晋山上堂の祝典が盛大に嚴修せらるゝのであつたから、了翁は豫て親しき道情を温  
 むるために大藏經全部を鐵牛に喜附して經堂までも建て、やりました、その經堂の屋

根などは銅瓦を以て葺いたと申します、猶ほ藏司寮を造りて看守者を置かれました  
 延寶三年了翁は四十六歳でありました、斯の歳、大猷院殿の遠忌に値ふたのです、  
 三百餘大名はそれ々其冥福を追修せられました、中にも了翁は生國の藩侯佐竹義  
 處公を補佐して東叡山に就いて佛事を營みました、此の義處といふは秋田藩侯歴代の  
 中でも名君と稱せられた方で、偃武の後にいでられ、勵精治を圖られましたから一藩  
 の文物典章煥然として見るべきものが澤山ありました、曾て修史館を開き岡本元朝  
 を總裁たらしめ、専ら治國安民の仁政を施かれ、常に佛教を信じ殊に興禪護國の宗旨  
 を體得せられた外護者で、徳雪院殿不山宗見大居士と申された程であります、了翁は  
 夙くより義處公の知遇を得ておられましたから、了翁が後日、佛國寺へ出世せられた  
 時は、義處特に禮帛を捧げ重臣を遣はして表賀されました、君臣の情味濃かなるもの  
 であります、元祿十六年六月十四日義處の横手城に病歿するを聞くと了翁は平生の恩  
 顧を謝するために大供養を營みました。

叔世の豪雄、法門の屏翰、民を視ること子の如く、國を治むること掌に似たり  
 一朝毘耶の床に臥して遽然として漆園の夢を醒す、遠近之を聞て、誰か太息せざ  
 らんや、即日前住佛國沙門了翁道覺、敬んで瓣香を拈じ爐中に薰向して、徳雲院  
 殿、前の羽林次將不山宗見大居士のために奉つて、報地を莊嚴す、伏して願くば  
 世々法苑の干城と作り、生々黎庶の父母となり、普く群類を度して、共に菩提を  
 證せんことを復た偈を説いて云く、

浮世繁榮夢一場 誰留看破赴他方  
 從茲道樹覺華發 妙果飛香日更長

是は了翁が追善の香語であります、更に又、了翁は齊筵を開いて君侯の徳を謝して  
 居ります。

徳雲院殿前の羽林次將不山宗見大居士、稟性恭敬、天縱仁慈、民に臨ふ日の如く  
 徳を布くこと春に似たり、況んや又、鷲峰の囑を忘れず、法門の金湯となる、闔

國之を懷て、萬邦之を仰ぐ、曾て思ふ積善の餘慶、必ず遐齡を保たんと、詎ぞ料らん俄然として天位に歸せんとは、國人考妣を喪ふが如くなるのみにあらず、林下の士と雖も亦た爲めに惆悵す、野衲元と羽州の産たるを以て恩を蒙ること多年向きに席を佛國に主どるを聞て、特に士人を遣はして厚惠を賜ひ、以て賀せらる護法の心深きにあらずんば焉ぞ能く此の如くならんや、急ち訃音を聞き老腸寸斷因て拙偈一章を述て以て輓す。

現身人世久繁榮、忽聽掉頭他界行、

懷誼設壇心惻怛、忘言燒柏淚縱橫、

每欽治國播仁政、更重扶宗護法城、

賴有門庭蘭蕙秀、芳蹤永接起嘉聲、

斯の了翁が輓偈に依りて見るも義處の人格も偲ばれ、又、君臣相許した了翁の偉大さも自然に字句の間に髣髴する様であります。

さて、了翁が國君義處の營む齊會には何にくれとなく、幹旋せしのみならず、日光法親王の命を承けて法華萬部堂の奠供の職をも司りました、其後は幕府に於て佛事ある毎に了翁は之を勤むる事を例とせられました。今茲、了翁は第二期の事業として、不忍池の畔に於て市纏の地を覓めて勸學寮並に經庫を經營せられたのであります。

了翁が四十九歳となりし延寶六年の頃は、錦袋圓の名聲は都鄙に喧傳せらるゝ様になり、藥舗の收入も亦た頗る豊饒になりましたが、同業者は商賣の敵として了翁を嫉みまして、種々惡辣な手段を弄して防害を加へ且つ不實の事を構へて官府に讒訴しましたから、了翁の藥舗は不意に官吏の檢察する所となりました、素より虚誕の毀譽に因つた事でありし故、曾無罪となりしのみならず却て了翁が多年精修苦行の功を聞いて感賞を蒙りました、了翁この際、修善の人は當さに衆難あるべきもの、須らく是れ確乎として動かざる須彌山の如くならざれば、大丈夫たるの梗概と稱するに足らず、

弘願も達すること能はずと覺悟なされました、此の歳、了翁は上野國に行き長樂寺を訪ふたのです、長樂寺は日本臨濟禪の開祖千光國師榮西の上足たる榮朝が草創の處でありまして古來、台密禪兼學の本寺でありましたから、此に投じて了翁は兼學の法印を受けたのであります。

(五)

了翁五十一歳、延寶八年の春、閩老濃州の太守稻葉正則に托して支那の續藏經を求めました、凡そ壹萬餘卷、並に儒道九流の書典五十餘卷も到來しました、正則は泰翁居士と號して禪學に親しみ了翁の道友たる鐵牛和尚に飯依すること篤く、曾て鐵牛を湯島の麟勝院に拜請せし程であります、了翁は則ちこの藏經及儒書全部を瑞聖寺に鎮置せられました、鐵牛は大に喜び上堂慶讚せられましたが、其の法要には稻葉濃州や大久保加州の二閩老までも寺に來て隨喜せられました、殊に大久保加州は了翁の偉

業一感じて親ら了翁を太守の府第に齊せられ、手づから茶を點じて饗せられしかば時の人々は以て方外の榮譽なりと稱せられました、此の鐵牛といふは木菴の弟子で禪門の獅子兒であるのみならず、濟世利民の志も在りまして、延寶六年に了翁と力を協せ彼の下總の椿沼を開墾せられ、新田八萬石を開かれました、鐵牛が此の事業には前後十數年の勞苦を費したが了翁は始終その背後にありて援助せられたのであります、是の年、了翁は東叡山の境内に勸學寮を建てんと欲しまして、辱なくも日光法親王の御許を蒙りましたが、末法魔多く、他の謗りに遇ふて果さなかつたのみならず、了翁の成功を憎む無賴漢ありて、或時は食器に毒を盛られました、幼兒少者を可愛がる了翁は偶々坐邊に在りし少沙彌に與へますると、その沙彌が之を食ふて忽ち紅血を吐いて悶絶しました、了翁此時は辛く生命を拾ふことを得たるが、毒を投せらるゝこと前後四回の難に遇ひしと云へば、當時、聲聞下劣の根性佛徒が、大乘の精神を發輝する了翁が菩薩業を如何に邪道視せしか同情せねばなりません、信は力なり」了翁は

常に佛天の加被力によりて健在でありました。

天和二年、了翁五十三歳、東叡山下に地方若干を賜ふの恩命を承りましたから、直ちに土木の業を起さんと計劃して居ります時、護法の財源ともいふべき池の端の薬舗が類焼の災難に罹りしのみならず、勸學院が竣工したならば安置せんと丹精を凝らして蒐集したる墳典壹萬四千餘卷も亦た悉く灰燼となりました、了翁の遺憾思ひやるべきであります。

天和三年は有名な癸亥の大饑饉がありました、了翁五十四歳既に知命の域に達し、道力愈々旺盛な頃、天下は不稔の凶難に遇ふて、立ち登る民の竈の煙も細々と世は暗憺たる不景氣でありました、餓死するもの幾千百餘人、所謂餓孚路に填まりて民に菜色ありといふ慘状であります、了翁の悲眼之を見るに忍びず、慈腸直ちに青銅一千一百餘緡を施して、貧者窮人を賑はし、死者をば親ら之を撻めました、而も此の春、道友鐵眼和尚が藏經を捧げて江戸に來りたるに逢ひまして相抱いて其成功を祝しまし

たが、鐵眼が、山僧今春大事あり長く留まるべからず生別或は死別を兼ねるもの了公や健在なれと、袖を拂ふて大坂に歸へられし時、畿内も亦た荒廢して居りました、鐵眼は刻藏の資本として粒々汗より出でし、巨萬の錢穀を施與して流亡の人々を救はれました、活きた大藏經の難有さに世の人稱して『救世大士』と申されました、斯の人に於て斯の友あり、俱に刎頸の契を結びしもの、西に鐵眼あれば東に了翁存す、肝膽相照らす當時の二明星であります、諺にいふ暗黒なる雲に閃めく電光は一段強く輝くと、袖手傍觀、徒らに口舌をのみ弄し紫衣乗駕、威儀を保つを能事とせし僧界に於て實際生活の救濟家たる了翁の活作略は慥かに當時の人々から、『如來様』と拜まれました、又、千金を投じて焼失せし薬舗を新たにす事業の資力を増加することも、忘れなかつたのです。

是の歳、久しく誓願せし、勸學院の工事が竣成を告げました、即ち中に經閣を建て棟檣は皆な銅板を以て包み、用意周到、火災防止の建築を試みたのであります、學寮

の傍には了翁が今日の成功を見るに到りし報恩記念のために受業師、並に戒師、寶石和尚、雲居和尚、及び兩親、養父母等罔極の恩徳を刻み、石碑を建てました、了翁が半枝の禮、反哺の恩を忘れざる美しき心の華は長く其餘香を捧げてあります、時に黄檗山慧林和尚が来りまして序を作り了翁の孝道に隨喜せられました、木菴、高泉の二和尚も共に文を寄せられてあり、叢林之を傳て佳話として居ります。

了翁この秋、遊行して偶々谷中に至り、日蓮宗の法恩寺の佛殿が大風のために破壊せられたるを見て轉た護法の情禁じ難く、黄金五十兩を送りて之が修覆の助と爲しました、主事の僧も歎じて曰ふ、了翁素より未だ曾て一面識もあらず而も其恩惠有ること何ぞ是の如くなる、と、了翁が誓ふ伽藍興造の本願は禪天魔と罵倒せらるゝ法敵に對してさへも平等に動く、自宗も他宗も了翁には一如相であります、社會奉仕よりも自己奉仕、奉公よりも奉己、自己が社會大となる時、自己奉仕は社會奉仕となる、聖者の心を心とせる了翁は打算的な商人の手を伸ばして藥を鬻ぐのであります、唯だ

了翁は佛如來の使者として萬民を救ふ力を求めて、生々世々を盡して、憐むべき衆生を救はんとするのみで、萬民を救ふ如來の慈悲は、結局一人を救ふことで、唯だ一人を救へぬものがどうして、萬民を救ひ得ようか、既に私自身を救ひたる了翁は、矛盾極まる現實相を超越して居られます、營利事業をやる俗僧であると謗られても寧ろ之を誇りとした、この誇りの裏面には入一倍の耻を覺えて居りましたのであります、了翁の目から見ゆる世の僭越なるものは、唯だ僧形をのみ保つ素凡夫で、教壇に立つて聲張りあげる時、厚顏無耻、智慧も信念も、禪定も光明も持たぬ淋しさ悲しさは説教か、提唱か、それとも何んの福音ぞや、庭前に囀る雀の叫び、後の田に鳴く蛙の聲、儚ないものだとしか映らなかつたのです、了翁は真劍に生死を賭して、而も一切を捨て、あらゆる世財と恩愛をも棄てて、そのみか一切衆生をも放却し、自己をも放却して真に自己を救はねばならぬ「救の力」を持ち得たればこそ現に今、第二義諦を建設し來つたのである、第一義門もやがてこれから開かるゝもの、時代の要求は

虚偽なる慈悲の聲にはあらずして、總てを犠牲とする意志の力でなければならぬと信じましたから世評に甘んじて錦袋圓を販賣して居るのであります、薬の効能が江戸化し、日本化し、世界化し、宇宙化したる時、其が歸依三寶の功德であると主唱する了翁の誠意には堅まり法華宗の檀信も感じまして我も我もと醸出する淨財は日ならずして法恩寺の輪觀を重興されました。

了翁が五十五歳の時、世は貞享と改元せられました、是の歳了翁は勸學院並に客院を建てまして講師と住持のものゝ爲めに往宅となされたのです、又、經庫二字を造りて内外の墳典凡そ三萬餘卷を納め、名匠に頼みて長一尺五寸の釋迦牟尼佛の像一軀を彫み之を院中の本尊と定められました、即ち天台宗碩學の者を招いて講師となし、學徒を安居すること數千人に及びました、更に講儒の者を請して内外の講經懈ることなかつたのであります、其の道心堅固なる殆んど絶倫と稱せられました、其の日講の規矩の如きも午前は内典を講じ、午後は外典を講ずるといふ風に佛儒一致を標榜し

て遂に常式とせられました、のみならず了翁は白金壹千九百八十兩を以て内外講師の資糧に充て、飽までも教化、育英の目的を達せしめんと欲したのであります、經藏や勸學院、寮等の修葺費もそれぞれ、積立てられ千古の基礎を築きました、輪王寺一品法親王も遂に了翁の盛業をお耳に入れられ頗る稱嘆せられ、乃ち學頭凌雲院に命じて般若心經を講せしめました、爾來、當時有名の學匠は競ふてこの勸學院に臨み、講經することを以て一代の名譽とする様になりましたから、宛然此の勸學院は東都の教學の龍登門となり、隨て江湖の學徒は僧俗を問はず來學するもの常に六百餘人を收容しておりました、了翁が曾て發せし所の弘願は此に至つて満足に畢つたといふも宜いのであります、時に一人の石工がありまして了翁の石像を造り之を院中に安じました、蓋し諸來の學徒が了翁の徳を頌して賛助する所のものであります。

貞享二年、了翁が五十六歳の時、大藏經を紀州高野山に鎮置せんと欲しまして、豫め、仁和寺法親王に此の儀を白しました、法親王直ちにお許あらせられましたから、



了翁は將さに高野に登るべく行李を整ひて居ります時、恰も輪王寺法親王より御下命がありまして了翁を勸學院權大僧都法印に任せられました。

謙遜なる了翁は素より平民の一野僧に甘んじ居る事とて、固く辭退したけれども臺命重々避け難ければ、遂に之を領せられました、即ち高野山に赴く途すがら、錦袋圓五千餘包並に青鐵若干を携て、行く／＼貧者病者を賑濟せられました、山に登りて先づ空海大師の廟に香を炷きました、嗚呼、時隔つ人去るも同じ濟生弘法の願力は、古今其志を一にする、了翁の境涯正に其の遺風餘烈に感じたるは尤もな次第であります、山上に光臺院といふ一字があります、人既に傑れたる處、地も自ら靈なり、かゝる境にこそ大藏經を安置するのが我の本意とする所なりと即ち經堂を建て銅葉を以て葺きました、山に留まること旬日餘、自ら火食を禁じて勤修する其精進力には、合山の大眾皆な敬服せられました、尋で洛陽に歸りまして仁和寺法親王に謁しましたが、恩意頗る渥く了翁は面目をほどこして辭されました、それから有馬に上り亦た温泉に

浴して元氣の回復を待つ、再び高野山に登りました、一日、山中を歴觀する次、古元帥秀次の石塔が見るも痛ましき程、荒れ果て居りましたので、了翁は低徊懷古、去るに忍びず嘆息せられました、憶ふに文祿四年太閤秀吉の怒りに觸れたる關白秀次は、威權山河を壓したるも昔の夢、尾羽を枯らせし英雄の末路は、應其上人を頼みて其寺に入り、無念の涙を呑んで自刃したのであります、其室の名も『柳の間』とて、『父母の頻りに戀し雉子の聲』と詠みし芭蕉の句に物の哀れを留めたる流石の秀吉も血縁の情は同じ思出草、雨に濡れて一朝の怒り忽ち覺むれば却て秀次を死に致したる下手人を恨みしといふ哀話の跡、戀か名か、太閤が『傳へ來し鳥もみ法を行ひの聲は高野に有明の月』と嘆じたる卒塔婆の影、其人空しく何處にか尋ねんや、怨親一如と觀じる了翁は取敢えず金を捨て、之を修覆し長へに英雄秀次の迷魂を鎮めました、人咸なその有徳に感じたといふ、留山半月、苦修前日の如くに怠りませんです、然るに經堂の工事已に竣るといふを聞いて復た帝都に抵りました、初め大藏經を請する時、台密禪

三宗の道場に各々五部の大藏經を安置すべく發願し來つたのであるが、而も今や此の願望が將さに圓滿に達せらるゝ様になつたのであるから、復更に六部を増加して共に二十一藏を揃へて之を鎮置せんと第三期の豫定を立たのであります、然も此願望は老後の置土産としては頗る大事業であるのに、宿痼未だ容易に去るべくもあらぬ現在の了翁は、能く之を果す事が出來得るや否を心配せられました、そこで、人事を盡して神力を仰がねばならぬとの起信より、年來崇敬せる八幡大神に詣で、懇ろに禱りました、自心他心皆な無心なる了翁の大心には、神も佛も感應し道交しけん、不思議や夢中親しく神の摩頂を蒙りましたから、了翁は其に力を得て愈々奮つて自分を策勵したのであります。

斯の時乃ち元祿元年彼の同參なる鐵眼和尚の大藏經所謂黄檗版七萬餘木が出來上りまして續々開版せらるゝ様になつたから、了翁は忽ち之を購ひまして高野山に到り豫約の如く光臺院へ納めました。

抑々この鐵眼といふは肥後の人、諱は道光と申し、十三歳出家の後、慶安三年京に入りて内典外書を學びました、明曆の初、長崎に到り了翁等と前後して隱元に參禪し、後、木庵に就いて啓叩し入室を許されました、寛文三年楞嚴經を肥後の禪定寺に講じ明年法華經を筑前の妙光寺に講じました、一日、曹洞宗の卍山禪師、天台宗の公慶上人と一所に邂逅して寒燈の下、冷茶を喫しながら鼎坐し、教界の時事を心行くばかり語り明しました、山雲海月の情味、俱に是れ當時の善知識なれば三人が、各自の進むべき目的を立てられました、公慶は生涯の事業として奈良の大佛殿を修理すべきことを誓ひますると、鐵眼は大藏經開版の事業を成就すべしといふ、卍山は、院に依て法を易ゆるの弊風を打破して一師印證の古規を復し、宗統を歸一することを願ひました、三人三誓の約を結び不惜身命の護法心を披瀝して、潔く水盞を交はして發程せしことを聞きました了翁は、深く三師の誓願に感激して彼等道友のために資力を提供し一日も早く、各々の事業を成就せしめたく斡旋の勞を取りました、殊に同宗同師同參

の親しみある鐵眼のためには、陰に陽に物質的援助をもすること莫大でありました、鐵眼が大坂に抵て専ら其謀を成すや了翁も密かに之を保護せられました、時に觀音寺の妙宇道人といふ奇篤な人より、白金壹千兩の義捐を得たる鐵眼は大に喜んで、黄檗山に登り隠元に白すと隠元も歡喜の餘り明版の藏本を與へられ、亦た勝地を割て藏版を貯ふる所となさしめました、それより印房を京師に開き、東講西唱、或は縁を江戸に募り淺草の海雲寺に禪要を説きしに、列衆數千人に及び、施物海會するといふ勢でありました、難波の瑞龍寺を中興されました。

後、熊本侯の飯依を得て禪を城中に説き、刻藏の助けにとて黄金壹千錠を拜領しました、延寶四年の春、木菴の法を嗣ぎ六年の秋、刻藏將さに功を竣へたれば乃ち上表して太上法皇に奉り、尋いで大藏經を幕府に進めんと欲して江戸にも赴かれました黄檗の宗風を天下に鼓吹し難波の鐵眼として聞ゆる様になりし其の背景には、常に了翁といふ興造弘經を生命とせる守護神が離れなかつたのであります。

了翁が幼時、發願してより今日までの功程を計算すれば大藏經ばかりも台密禪三宗の大道場即ち、山城の萬福寺、武藏の瑞聖寺、小松寺、伊勢の圓福寺、大和の法徳寺、遠江の寶林寺、山城の善福寺(以上禪)武藏の寛永寺、近江の延曆寺、下野の宗光寺、武藏の金讚寺、山城の興聖寺、上野の長樂寺、下總の月山寺、(以上天台)紀伊の高臺寺、高野山、泰雲院、新別所、河内の延命寺、大和の淨東院、武藏の靈雲寺、(以上密宗)等の二十一箇所に安置したるの外、群籍墳典は無慮五萬八千餘卷に及びました、此等の事業は皆な錦袋圓の神效より獲たる利金にて、かくも偉大な功德が現成したのであるから、佛の誠め給ふ吉凶を占相し、湯藥を合和し、況んや是を販賣するの罪過は、畢竟不可得、總て和光同塵の菩薩業となりて、芥子許も佛はお咎め下さるものではあるまじと確信したのであります、而もこの頃は錦袋圓の信用が四百四病の神藥なりと世間の需要頗る多く門前市の如く、之が供給に骨を折るといふ隆昌を極めましたもので、同業者が名を冒して詐り、贗藥を造て賣るものさへ夥しくなりました。

た、利を見るに敏なる商人の如きは、大膽にも同じ池の端に店を構へて、錦袋圓の元祖は、こちらであるなど、吹聴して不當な利益を貪つて居るものが有つた程で、或人が了翁に勧めて之を官府に訟へよと云ひますれば、了翁之を拒んで、藥を賣るの趣旨は元來納經興造の大願を達せんがための方便に過ぎぬ、而も納經も興造も菩薩の慈悲業なれば、世間の人が若し詐りて贗藥を賣り、それにて身の資ともならば幸甚なり之を敢て制止するには及ばずと申されましたから、聞く者皆な了翁の度量海の如きに伏し、誠に濁世の活佛、衆生の藥師様なりと感しました。

(六)

元祿二年、了翁が六十歳の折、天台山に登りまして、大會に預りました、辱なくも勅旨を承けて堅儀を勤めました、この大會といふは五部の大乘經を供養する法會でありまして、白河天皇承應三年、法勝寺に於て初めて行ひましたものであります、勅

して圓宗寺の法華會と此とを合せて二會となし、天台の高僧に命じて講師となし、二會の講師を経たるものを僧綱に任ずるといふ頗る權威のあるものでした、了翁の勤めました堅儀の法は古來、南都、北嶺同じく之を行ふたもので、禪林に於ける五山乗拂の類であるから、一會の上首、人天の導師といふ重い役であります、此の時了翁は天台山に在學の僧侶が、往々山を下りて市街に出で、儒者の講席に列つて、儒學を聽講する有様で、動もすれば僧儀を亂す風があるを見て、金五十兩を寄附して山中に講儒の會を設くるの資料に充てました、天台山の學僧中には、台家には講儒の儀なしとして反對するものも有つたが、依文解義の教相は文字に暗らければ學地に到ること至難なりと辯駁して、遂に講儒會を設ける様に致されました。

六十一歳の時、了翁は去て瑞龍山南禪寺に謁しまして、虎關師鍊大師の遺蹟を探ぐりました、虎關は日本に於ける最初の佛教史たる『元亨釋書』の著者として有名な碩學であります、山中に在る虎關が初めし所の濟北院は、年光歲華既に久しく廢墟し

て居つたから、了翁は例の通り黄金五十兩を揮て之を重興し、且つ中金五十版を捨て、大梵鐘を鑄て納めました、常樂我淨の聲は、春花秋月と共に偉人の聲咳を傳ふる様になりしました。

元祿四年了翁は洛陽の建仁寺に拜塔しました、建仁寺は日本臨濟禪の開祖榮西が建仁三年源頼家の助縁によりて建立せし所、本朝最初の禪苑であります、五山の第三位を占め勅して台密禪の三宗を置かれました、榮西即ち眞言止觀の二院をも寺に構ひられました、七堂伽藍の偉麗も近世影暗く、建仁寺垣で名高き名利も、中の門の南より塀の代りに遶らせし青竹垣に光る露の雫、壊れた垣根に苔壘を踏んで佇みし了翁は自分も三宗兼學の流れを汲むもの、いかで斯の有様を見逃がすべき、巨額の黄金を揮て山主に供し以て力を戮せて之が鼎建を計りましたが、衆議纏らず、了翁も時機未到らぬためならんと嘆じて止みました、かくも了翁が執り行ふ種々の善巧方便は別に自他の雜念あることなく、唯だ絶えたるを見ては續き、廢れたるを聞いては興さん

とする護法の一徹心のみで、向上より行く水の向下に潤さねばやまぬ有様です、資材が斯くも豊富なるにも拘らず、身を處する事は極めて儉約でありました、東西南北、殆んど足跡を印せざる所なき程諸國を巡りましたが、未だ曾て馬や輿に乗つたことはなく、行いては到る水の窮まる處、坐しては看る雲の起る時、生涯テク／＼健脚を運びました、食物の如きは勿論、味を覺えぬといふ枯淡なもので、唯だ生命を繋ぐの薬として、善きも悪しきも其量を易へぬと申します、恒に日課として文珠菩薩の神呪即ち五字文珠法を修せられました、阿、羅、跋、捨、那、の五字を七日を限り五十萬遍を繰返さるゝ事、十七歳の時より未だ一回も懈らなかつたとの事であります、かくて自己の劣根なることを自覺して智慧第一と稱せらるゝ菩薩の光明裡に成長せんと努力せられたのであります。

元祿五年、了翁が六十三歳の時、本師なる佛國開山高泉禪師は勅旨を承けて黄檗山第四代の貫主となられました、了翁が心機相契ひ證契即通したる此の高泉といふは抑

々如何なる人なりしか、高泉諱は性激と稱し、曇華道人と號します、清の福清縣の人十三歳にして出家し、福建、黄檗山に登りて慧門禪師に師事し、其法を嗣がれました寛文元年、隱元に呼ばれて來朝し宇治の黄檗山に止まり龍溪等と協力して萬福寺の基礎を強固にせられました、寛文十二年加州の献珠寺の請に應じて住し留まること年餘、隱元の示寂に際し黄檗山に還へられました、延寶二年再び藩主の優遇を蒙りて献珠寺に住し中興開祖となられました、後、宇治に戻りて頻りに宗風を宣揚せられ、屢々宮中にも召されて法要を説かれたのです、延寶三年六月『扶桑僧寶傳』五卷を撰して上りましたこともあり、又江戸に入りて綱吉將軍に謁し、禪要を提唱せられました、遺著には『扶桑禪林僧寶傳』三卷『同續傳』三卷『東國高僧傳』十卷『洗雲集』十卷『佛國高泉禪師語錄』十卷『山堂清話』三卷『東渡諸祖傳』法華略集』有馬温泉記』釋門孝傳』各一卷あります、勅して大圓廣慧國師と諡せられ、黄檗山中興の祖と推稱せられて居ります、其の山城に佛國寺を創めて住せられし時、靈元上皇

勅して寺額を賜はりました、この年(元祿五年)黄檗山に晋住せられ、紫衣を賜ふといふ事を聞きし了翁は直ちに上山して賀偈を呈せられました。

奉賀本師高泉和尚賜紫

道光暉燦嶠、 椹服出楓宸、 龍象奔騰處、

挽回鷲嶺春、

高泉の一人、了翁が其師の瑞世を悦びしもの情愛擲すべきものがあります。

了翁は滯山相變らず累りに高泉の禪榻を叩きました、ある日、高泉に白して曰く、斯の澆季の世に當り頼に本師の如きありて大法を祖山に開くに逢ひ、親しく法乳の慈恩を喫し得たるも、本山の伽藍未だ周備せざる所あり、且つ既に破損したるものあれば、弟子が幸に餘す所の財を投じて之を修繕せんと欲す、希くば再び靈山の莊嚴を観ることを得んか、和尚是を許し給ふや如何、高泉之を聞いて歡ぶのみならず、合山の龍象皆な賛歎隨喜したれば、了翁は雨安居九旬の間、例の如く巨額の淨財を捨て、

法堂、禪堂、齋堂、東西の方丈等を修葺し、更に厨庫を擴張し、新に浴室と廻廊及外門、方丈の小厨をも増して、其餘の堂塔或は補ひ或は葺いて黄檗山の門景を一變いたされました。山門を出れば日本の茶摘歌、黄檗山の特徴として伽藍の構造が獨り奇古閑雅なる支那風なるのみならず、隱元在世の昔より大正の今日までも、法堂法具は更なり日用の言葉も悉く支那語なれば、朝勤暮課の經文までも、明音でありますから、足、一たび『第一義』といふ門額の下を跨げば、眼に觸るゝものは是れ支那式で、耳に入るものは悉く明音であります、讀者諸君、若し日本にありながら支那の而も前世紀的な雰圍氣を味ふて見んと欲するならば、宇治の黄檗山に探勝せられんことをお勧め申す、黄檗山といふも山ではありません、其境内は實に坦々たる平地であります、唯だ黄檗と聞くさへも支那の黄檗山を想ふ、我等は嵯峨たる十二峰の奇景が腦中に浮ぶのであります、隱元が特に山上を擇ばずして山麓を選んだのは從來の山の佛教が、やがて野に下らねばならぬことを看破したる、時代順應の教線を擴げたもの

であります、今日猶ほ黄檗山の莊嚴が、我國には唯一とまで行かぬも随一たるの光榮を有するもので、伽藍の宏壯、境致の雄偉なるは其特色なるが、而も了翁の肝煎によりて斯くも井整安備したものであります、支那風に掲げある種々なる額面を仰ぎ、様々なる聯掛を見れば、皆是れ隱元や木庵や即非や高泉や千呆等の書する所、文は人なり字は人を現はすもので、蒼古秀潤の筆、莊重典雅の句、我等は眼前に善知識の宗乘を聞き、祖業を商量する氣分に浸ることを得るのであります。

『通宵路』『白雲關』を通れば『門外已無差別路』の境に入り、『雲邊又有二重關』を過ぐるのです、大藏經の開版者鐵眼の暖皮肉は『西方丈』の畔、老樹鬱葱たる處の古廟に埋められてあります、『東方丈』に坐すれば身心靜寂に落ちて『岸谷胸中新氣字』の消息を吸ふて『一痛棒頭明殺活』の禪機を吐き、黄檗の家風がしみくと感せられまする、開枕の版聲遠く雲に響いて喫茶の刹那、『謹白大衆、生死事大、無常迅速、各宜醒覺、謹莫放逸』と唱ふる凄愴なる明音の古調を聽かば支那的妙味に我等は酔ふて陶

然となるのであります、『隱元の徳、木菴の道、即非の禪、高泉の識、南源の詩、悅山の書、逸山の畫』と梅櫻桃李各々其妍を競ふて世人に稱せらるゝ其外に千古萬古空しく椽の下の方石と埋れて、黄檗山を動搖させぬ様に、賣藥して得たる幾萬兩の維持金を提供したる我が了翁は、其名さへも知るもの稀なるは甚だ遺憾であります、我等は二百餘年外の聲として、暮鐘隱々たる夕べ、啞々たる晚雅が巢を尋ぬる點影を眺めて帳然古を懷ふのであります、了翁の大人格は不増不減の輝を投げて、燦爛たる星斗のそのの如く、『松隱堂』の窓外に師の影を踏まずに逍遙して居るのであります。了翁六十四歳即ち元祿六年の秋、江戸の藥舗より産する所の収益を整理して、黄檗山の祠堂金に充てたるのみならず、山中の各院、及び佛國寺の修繕費等に備えました。更に又白金百五十兩を捨て、東叡山學寮にて毎歳行ふ灑書の齋儀料等に當てました。元祿七年、了翁もはや六十五歳ともなりし故、東叡山を辭して再び黄檗山に上りて悟後の修行に閑日月を送らんと決しました、蓋し是の年までには二十一藏納經の誓願

も達せられましたからであります、山に上れば本師高泉は直ちに藏司といふ役を了翁に命せられました、一日一書を高泉に呈しました。

六十五年前是の如く、六十五年後も是の如く、即今六十五亦た唯だ是の如し、畢竟如何が了解せん、如是如是、又云く、了々として見るに一物なし、唯た此の天真のみありて萬法と侶ならず咄、

高泉之を視て證明せられて曰ふには、

好し一咄、若し此の一咄をしてなからしめば、如是と曰ふと雖も未だ嚙坐する所あるを免れず、則ち悟跡も未だ除かず、大徳既に此の境界に到る、尙ほ何ぞ言はんや

個事多年細用工、者邊那畔竟無踪、

竟無踪處全機露、正是人間了事翁、

かくも本師は弟子たる了翁の大悟處を印可せられました、此の夏、黄檗山の門前左頬の地を下して了翁は天真院を開創し以て末後終焉の地と定められました、秋に至て



工事も竣成したれば、冬安居法を結ばれました、高泉は了翁に命じて版首に充てられたれば了翁心静かに禪定三昧に入りました、或時、

工夫熟處盡心念、心念盡時工亦空、

水天一色別天地、明月蘆花類不同、

といふ詩を作りて高泉に呈したるに、高泉は之を閲し畢て、此の篇は是れ禪定中の境界、麤心の人の能く知る所にあらずと感賞せられました、又了翁は常に畏敬する所の獅林禪師にも參得せられました、此の獅林といふは矢張支那福建の生れで、諱は性瑩と申しました、夙に隱元に黄檗山に侍し、大事を明らめ、二十七歳の時、隱元に隨身して我邦に來られた人でありませす、遠州の近藤語石居士の請に應じて寶林寺を創め、後ち、上州に國瑞寺を創し、天和二年の春、命を奉じて黄檗山に陞られ衆生を接化するること十一年餘、元祿五年の夏、獅子林に退隱せられて居つたのであります、扶桑寄歸往生傳」といふ著作もある善知識でありましたが、了翁とは格別に親密でありました

了翁、因みに前偈を翻轉して呈して曰く

水天一色總無隔、明月蘆花絶異同、

是境空時心念盡、心空境盡廓圓融、

獅林は此の了翁が悟處を見て頗る喜び且つ證明して云ふには、心境既に空じ、一色打破し、斯れ乃ち真空を徹證するもの、頑空には非らず、この偈の意趣まことに據る所ありと激勵せられました、然れども了翁が、一生不退心の求道は尙ほ満足せられず翌日また獅林に參じますると獅林は偈を以て却て、了翁に徴詰せられました。

日前心境話、圓融無際中、今朝重徵詰、徹底要心空、

百尺竿頭に更に一步を進めたる獅林は座にありし、手爐を提げて續け様に問ふて曰く、是れ心か、是れ境か、是れ空か、是れ非空か、と猛烈に襲撃して學人に呼吸をも吐かせぬ師家の活手段、此に於て了翁は獅子反擲の勢を出して、天地も裂けよとばかりに大喝一聲しました、獅林なほあきたらずして曰く、喝する底の外、亦たどう

する積だ、サア道へサア道はぬかと喉元に擬する鋭鋒を受けて了翁は、身を轉じて辛く一條の血路を開き、機に臨んで心境俱に空する時、一喝せば百川水逆に流ると叫びました、獅林も初めて如是如是と賛嘆せられたれば、了翁は起て禮を設けて謝しました。

(七)

了翁が悠々として閑雲野鶴の境涯に入りし期間は、まことに短日月でありました、僅かに黄檗山に滞錫して高泉の膝下でありし時許で、而も幸福な感謝と恩寵の生活であつた様です、禪餘口ずさみたる『天真稿』と題したる一冊には十餘首の詩偈をもつて居りましたが、元來、了翁は文筆の士ではなく、自らも文筆などは柄でないと思はれて居りましたが、金麟の片鱗、道情の發露したるものが却て自然の妙味を存する様であります、曾て、了翁の法兄たる大隨和尚が『了翁語録』に書かれたる序文に能く、

了翁の性格と功業とを評してあります。

吾宗只だ悟處を貴ぶ、其餘は取らず、六祖大師始め黄梅に在て、秀公の字を讀むこと能はず、張別駕をして讀ましむ、聞き已て便ち知る、此の偈未だ自性を見ざることを、又自ら偈を作て書すること能はず、別駕をして書せしむ、後來、如來の大法を得て横説堅説、無礙自在、學者編して法寶壇經と曰ふ、吾が法弟了翁禪師、從來文字を理せず、唯だ道、之を勤む、曾て江武の東叡山に在て、悟處有り、遠く一紙を先老人に呈して以て所解を通ず、老人、焉を證す、磔嶠に登るに及んで、機々相投ず、客歳、遺命に順つて席を佛國に繼ぐ、今年八月に至て退く、其際、上堂、小參、應機説法、既に一卷を得たり、上足仁峯公、袖にし來て序を請ふ、山野未だ卷を開かずして便ち諾す、峰曰く、請ふ削るべきを削り、筆すべきを筆して後に序せん歟、山野笑ふて曰く、了翁の文字何ぞ必ずしも雅ならんや、何ぞ必ずしも雅なることを要せんや、貴ぶ所は悟處のみ豈に敢て筆削を用んや、之を閱するときは則ち

果然として、一々自己の胷襟より流出す、實に柳花の文字にあらず、其の純朴の意味、恰も一部の壇經を讀むが如し、今時、學解者流の氷に鏤め、油に畫く者に比するに、地と天となり、蓋し山野未だ卷を開かずして便ち序を作ることヲ諾するも亦た謬らさず。

蓋し法兄弟の關係として流石は嚴正な批判であつて而も了翁を推して六祖大鑑禪師に較ぶる所、頗る我等の意を得たるものであります、了翁の眞面目も活躍して居る様であります。

却説釋迦牟尼佛が靈山會上に於て、金波羅華を拈するや八萬の大衆、瞬目揚眉、皆な茫然たる中に、獨り迦葉尊者のみありて破顔微笑せられました、爾時、釋迦は我に正法眼藏、涅槃妙心有り不立文字、教外別傳なり、今、迦葉に附囑すと授記せられてより、西天廿八代にて菩提達磨に至る、達磨の一華五葉を開いて結果は自然に成ずる處、航海萬里、支那に渡りまして梁の武帝に謁し、彼の有名なる問答がありました、

武帝問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義、達磨答へて曰く、廓然無聖、武帝更に云ふ、朕に對する者は誰ぞ、達磨は「不識」と答へられました、帝、契はず、達磨は江を渡りて嵩山に入り、少林寺に隠れて面壁九年を経慧可大師を得て法を傳へました、それより東土に於て六傳して大鑑慧能に到りましたものです、初め黄梅山の大滿禪師は一千五百人の大善知識として如來嫡傳の佛法を提唱するや、四百餘州の耕雲種月の權は其の掌裡に歸崇する勢でありました、隨て門人も亦た多士濟々であるが、神秀と慧能とは恰も蘭菊の美を爭ふたものであります、神秀の悟處を現はせし、身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむること勿れ。

といふ偈を、慧能は否定して、而も大膽に露骨にも、菩提もと樹にあらず、明鏡も亦た臺にあらず、本來一物もなし、何れの處にか塵埃を惹かんや。

と訂正して所解を述べますと、満山大衆の物議を起したのでありますが、然も大満  
 禪師は博學宏才を以て稱せられし神秀を取らずして、無學朴訥を以て自ら許るせし大  
 鑑慧能を愛して大法を之に相續せしめました、神秀は合山の上座であるが慧能は碓坊  
 にて米搗きばかりして居つた和尚でありました、其れより南宗、北宗、頓漸の禪風を  
 異にする様になり、慧能は曹溪山に在て最も振つて居つたのです、之を六祖大師と尊  
 んで居るが『六祖法寶壇經』といふものが残されてあります、二十四流白浪滔天の  
 勢は更に榮西をして臨濟宗を傳へしめ、道元をして曹洞宗を齎らさしめ、日本國の  
 土の香に育くまれては、全く醇乎たる日本禪を組織する様になつたのであります。  
 了翁の生立や境遇や性格は稍々慧能禪師と類して居る様ですが、唯だ明月と蘆花と  
 の如く同じからぬ所は一色光明の大影と小影と、而して強弱の程度が違ふばかり  
 であります、然し斯の『天真稿』の如き必ずしも金玉錚々の響なきも猶ほ且つ偽ら  
 ざる了翁の閃きがありて、既に作家の域に入つたものと思はれます。

(八)

天真稿

了翁

久しく東都に寓して、専ら興造を務む、今已に老て熟慮忘じ難く、再び梁山に  
 飯る、衆に隨て坐禪す、禪餘口に信せて偈を作ること數章、

本來面目無面目、無面目處露堂堂、欲知面目今何在、火自熱兮水自涼。  
 天真天真總天真、不天真豈顯天真、鴉鳴雀譟天真句、花紅柳綠亦天真。  
 蚯蚓截爲兩斷了、佛性當知有那頭、此理不須千聖說、火風散處自然休。  
 三十年前出此山、欲成大願寓江間、今也要明第一義、依然易服入禪關。  
 年老雖形瘦、身心猶未衰、明師今得遇、猛省在斯時。  
 喫茶又喫飯、已困打閑眠、日用唯如此、不須走外邊。  
 探道元不遠、何分西與東、十方無罣礙、活步大虛中。

大道見來無覆藏 神光獨曜徹諸方 個中乘興優遊處 逆順縱橫總不妨  
影是從形出 形空影亦空 經行飯位後 依舊下純工

四大元無主 因何成此形 俄然逢火浴 依舊沒星々

六十五年似電光 光中爲法幾回忙 今朝不問明朝事 一任頻添兩鬢霜

人命如燈火 油乾火必消 此時君識否 十界自寥寥

即空即有兩皆非 非有非空亦問語 瑞的分明欲自知 請君問取燈籠去

今夜晴天月一輪 影臨萬水正圓成 照徹面門無別事 花紅柳綠自明々

手闢禪坊知幾所 天真自得吉祥嶠 休嘆老去拘緣務 興造願心獨未消

賀西堂鳳山禪師乘拂

鳳來自靈知 德山內麟龍意氣憐 西祖遺風豈墮地 堂々煒々尙繁榮

賀後堂文潭禪師乘拂

文能貫道復何道 潭底銀蟾本在天 後聖先賢皆如此 堂中雲水好探玄

文江錦浪翻無盡 潭底潛龍今上天 後學老參齊感嘆 堂々雲衲共通玄

元旦祝聖

麟鳳迎春競法筵 朝來林嶽瑞光鮮 慇懃焚柏寶爐內 嵩祝聖君億萬年

結解上堂

圓覺伽藍禁足節 盃囊高掛萬緣休 大家欲識安居意 已道鐵船水上浮

解夏示衆

制中示衆有何話 不管眉毛墮與生 圓覺伽藍開戶牖 江湖龍象任縱橫

浴佛示衆

指天指地是何者 方識昔時藍尼妖 今日不須雲老令 慇懃香水蘸頭澆

賀大信和尚住瑞龍寺

乘時補席法中龍 唱起紫雲的々禪 從是宗風揚萬里 嘉聲藉々徧三千

薦覺源宗徹信士

秋風吹覺閣浮夢 眼底不疑契本源 西祖宗門無別事 古今洞徹盡乾坤。

薦道甫永春居士

十有七年如電影 忽聞風水感傷頻 賴承深孝迫修福 永樂淨邦不盡春。

賀龍堂和尚住淨住寺

葉山呈瑞日 始上堂中龍 從是勝緣熟 永振西祖宗。

端午示衆

叢社已逢端午節 前山雨霽綠蔭濃 何須門上着桃艾 百怪千妖曾絕蹤。

高泉禪師七回忌拈香

一入無聲已七年 餘風不歇利人天 今朝信手拈香處 直作雲臺覆大千。

一滴即源居士雖在塵中不肯汗染每參控諸善知識開山高老人曾寓江都養病次延於別業供養數月敬之如生佛也客冬已得病自知不起祛湯藥臨末書偈往矣孝子特就于本山設伊蒲饌供清衆因作之助薦

槐夢繁榮曾看破 平生深愛祖師禪 曹源滴水乾窮處 頻吐清香火裡蓮。

治齊順良居士天性温良富而不奢恭而有仁曾見高老人不異視優曇時々參控密伸供養猶恐人知可謂有陰德也想受陽報永作法門擁護詎料忽朝西往矣因作此以悼

徵君重法不尋常 豈憶俄然歸北邙 往日屢窺臨祖室 頃年高臥淨名床。生前已露仁慈厚 身後猶餘聲譽香 賴是家中有蘭子 門庭相續曜榮長。

「天真稿」の詩章、朗々亦た誦すべく、誦すれば、おのづから朗々の氣分に我等もなる様であります、是等は素より大隨法兄の謂ふが如く全く了翁が人格の放影に過ぎぬもので、了翁の眞骨頭は、かゝる文字禪以外に活きたる佛陀の使命を帯んで居るのであります。曾て弟子の仁峯が了翁の壽像を畫かしめて、之に讚を請ひますると、了翁直ちに筆を呵して

眼底字を知る事なく、胸中禪を會せず、老來喫飯の事、頓放す陪臚の邊、咦、

仁に當て譲らず天王の上、笑つて看る翠峰の碧天に聳ゆるを。

と題せられました、是れなどは、天真爛熳偽らざる了翁の腹の奥底でありまして、興造弘經の大願を以て自ら任ずるの意氣は、むしろ冲天の概あるものでありませんか  
況んや、了山禪人が同じく了翁の像に題言を需めたるに應じたる左の語を見よ

咄この痴漢、誤つて祖筵に上る、福慧半點もなし、宗綱を一肩に擔ふ。興造の願心、皆已に了つて、青山相對して安眠を打す。

露堂々に自己の天職を標榜する處、痛快であります、無學、文盲に近き一寒衲ながらも、而も宗綱を一肩に擔ふと自重するが如きは、千歳の後、其の凜々たる風丰を、想見するに餘りあります。

(九)

元祿八年、了翁六十六歳、正月元旦高泉禪師の室に入りまして、密かに佛祖の心

印を禀けました、面授の法門は暖かき手から暖かき手に握られたのであります、是に於て了翁が一生參學の大事畢つたのであります、初九日は大樹國君のため祝壽の上堂に逢ひました時、法喜禪悅の餘り、列衆を出で、云く、昔日、世尊密語有り、迦葉覆藏せず、今時、堂頭和頭も密囑あり、妨げず、人天衆前に向つて拳出すること、了翁遂に拂子を以て一拂して、古今異ありと雖も其理則ち同じ、畢竟、如何が委悉せんや咄、咄、咄、驪龍領下の珠を擊碎して、敲出す鳳凰五色の髓、といふて使ち禮拜すれば、高泉も、八十の翁々場屋に入る、眞誠是れ小兒の戯にあらずと申されました、了翁即ち云ふ萬古永く芳を流ふ、高泉曰く風流ならざる處也た風流、了翁此に於て和尚の證明を拜謝されました、高泉喜んで珍重せよといふて了翁の左肩を撫でました、されば了翁は即日參堂、巡察して佛恩を謝し、大衆にも挨拶すると江湖の學人は偈を作りて賀せられました、仍て春夏の際、また例の如く金を揮て佛國寺の佛殿、禪堂、方丈、並に小厨等を修葺して、冬安居の制を結びましたが了翁は常に出資して知浴せ

られました。

了翁六十七歳の折、洛北の興聖寺に到りました。此の寺は古來台密禪兼學の勅願所でありますが、来て見れば殿堂も備らず佛像さへも整ふて居りませんから了翁は例の如く直ちに金を揮ふて、自ら古い佛像を請し、之を莊嚴して送りました、且つ住持の長老に勧め、興造の資金として金一百兩を寄附しましたから、住持も其篤信に感じ檀信にも勸化致し、やがて立派な伽藍を再建することを得、門觀を改めました、是れより先、此住持人も精々之を有志の檀信に謀りたるも、既に三代も前からの懸案として其儘に放任せられ、到底大綱再築の工事が起しかねて居つた處、了翁の發願と刺激せられて茲に初めて復古の盛業を呈する様になつたのであります。

復、了翁は天真院の境内に就いて、文庫を建て内外の經典を安き、了翁自らの壽像をも置かれました、之は素より嗣子仁峯の請ふ所に任せたものであります、碑石をも文庫の傍に建てましたが、其碑の銘は曾て癸酉の歲、師の高泉が選文する所でありま

した、唯だ醜の中に未だ了翁の衣を更へ祖燈を傳ふの事が缺けてあつたから、門人共が寶藏電和尚に頼んで、二百餘字を碑陰に録したものであります。

而して佛國寺にも藏經の庫を建て、内には矢張、了翁の壽像を安かれました、此の壽像は了翁が自分で開眼せられました様です。

過去身も不可得、未來身も不可得、即今現在身も亦た不可得、三世總に不可得、(此時了翁は拂子を以て像を指しぬ) 這個は是れ有相か、是れ無相か、只だ安座開眼一句の如き作麼生勢縁契ふ處、永く蹟を留て、法門を擁護して祖堂に對す。

此の様な法語を唱へて自己が自己を開眼し、了翁が了翁を安座せしめて居られますが、鏡と鏡と相對せば中には何の影なきが如く、佛は唯だ佛を知るのみであります。斯の歲、了翁は天真院の浴堂を修葺せられました、最初、天真院を此地に窺めてより飲料水を得る爲に五六ヶ所も井戸を鑿りましたが、此處も彼處も不潔な水なので困つて居りし程に、今歲は又大旱魃が續きましたのでますます水に窮する様になりました



時に老農がありまして能く此邊の地理を諳んじて居るが、其の言を聴くに、昔は井戸があつて而も甘きこと醴の如き水が滾々として湧いたものだが中頃廢れて田圃になつたと申します、依て了翁はこの老人の言ふがまに／＼累りに土工を役して境内隈なく胡穿し亂整せしめた處、適々雲厨の巽の隅に當て、妖巖怪石累々壘々と埋まり在るを發見しました、了翁恠んで之を發掘して見れば乃ち古井戸にして清水が音を立て、溢れました、了翁歡びに堪えず因て『再來泉』と名づけました、是れも先佛曇祖が惠まれし杓底の殘水なりと感謝せられました。

從來、黄檗山に賜ふ所の官糧の田地は、總て四百石許であつたが、都て是等の耕地は五箇の庄に屬してありました、此邊は今の京都、宇治村の大字で、古の岡屋郷といふ地でありませ、古來、太上皇后及近衛家の所領が相連接して居ります、歴史の殘影を偲ぶに足る館趾や墓所などもありまして五箇の庄といふ名も『御家莊』の謂なりといふて居る様であります、而して此の地方一帯は古來僅かに五所の瀾水のみを

以て郡民が生命の泉として頼んで居つたが、淺くて隘くて、水量も多からず動もすれば旱魃のために被害を蒙るを常として居りました、官家にては公家にては況んや黄檗山の如きも毎歲入石米の減せらるゝので閉口して居つたから、了翁は豫て椿沼開墾に參與して積める經驗眼を開いて其の利害の緒餘を觀察の上、意を決して遂に五所の水を擴充し彼の畜ふる所の水をして、深く廣く、永く旱魃の虞がない様に改修せんと欲しました、此に於て了翁は先づ土木費の調達にかゝりました、夫の黄檗山所管の如きは自分で金を出し、兩所の官田は他より金策し來て年賦償還の方法などを立て、一般地方關係の部分は村債の様な組織を以て募集し、漸く其豫算が成立しましたから了翁親ら人夫と伍して勞役にも服し又督勵して經營慘憺を極めましたから、道の漣漣水利の大事も完全に出來上りまして、爾後は滿分秋成の恩澤を承くる様になり、庄内の農家は皆裕福となりました、官家公家を初め黄檗山への納税入作も虧くことなくなりましたから、地方の開發者、『田をみ廻りの神様』なりと了翁の徳を稱しました。

顧みれば了翁の幼時は殆んど涙の歴史なりき、然るに今や道成り功遂げまするにつけても、轉た自己が生立の跡を偲ばすには居られません、是も昔、我を引立て、撫育してくれた郷里の徳者齋藤自得居士の御蔭に依るものであると感ずる時、了翁はしみじみと居士提獎の恩徳を心から難有思ふたのであります、それも夢、これも影、恩人は世を去つて既に五十年、せめては其の涓滴を本に報え、冥福を始めに反すべく天真院の東に一棟を構へ特に「自得院」と題して、専ら居士のために追孝の誠を捧げました、更に秋出に歸り郷人にもそれく報ゆる所がありました、居士の遺族を戀ろに訪ふて、舊誼を謝し、又地を郊外に選んで自得居士追恩の碑を建てました、今も尙ほ現存する幡野村の近くに「一字一石塔」といふものが残つて居るが、是は了翁が一拜一涙十萬八千佛を禮して供養したる、まことに貴き無影樹であります、湘の南、潭の北、藪にも光る黄金ありて、夜泣する兒、蟲氣に惱む兒、乳の出ぬ母人が、此の碑を信じて拜めば、子安大士の御利益を蒙るといふて、二百餘年の後、冥々の裡、

了翁の遺徳を追慕しておられます、露に咽ぶ蟲の夕、花散る鳥の朝、縷々たる香煙、蕭々たる燈明の影は、「禪師様」と稱して村人が信仰の標的となつて居ります。

宿幡野憶了翁禪師

蘇舟

佛國發祥何處尋 梅經二月未開唇 普門功德高低雪 慈眼光明平等春

三十三身雖影異 童男童女一其心 入郷先見郷風密 不問今人憶古人

了翁は斯の歳、黄檗山の梵鐘が餘りに規模貧弱で、到底叢林の禮樂、龍象の號令とするに足らざるを遺憾とし、例の如く金を揮て徑三尺四寸といふ巨鐘を鑄させまして之を山上に掛けました、獅子の吼ゆるが如く、大鯨の潮を噴くが如き朝暮の聲々は、千歳なほ了翁の人格の餘響であります、又、中金五十版を捨てて獅子林の佛殿を建てられました。

元祿十一年、攝州に遊びまして了翁は、吉祥山徳大寺を重興せられ、籌室及び寮舎をも増築して舊觀を復し、先師高泉を拜して開山第一祖とせられました、此にも復

大梵鐘徑三尺五寸のものを鑄て、樓閣をも建立し、之を掛けました。

此の春三月、宇治縣内が大凶作に遇ひまして饑者、病者が路頭にごろ／＼倒れて死んで居る慘狀であつたから、了翁例の如く黄金百兩を施し、薬の數々をも惠みて、救濟の道を講じました。

(十)

明けて元祿十二年になりました、人生正に七十となつた。了翁は、京師の名工をして丈六の觀音菩薩の銅像を鑄させまして、之を徳大寺に安置しました。復、自分が古稀自壽の紀念として矢張觀音の小銅像を、驚き給ふな、三十三萬三千三百三十三尊體を鑄あげて、徧く淨信の緇素に施し、普門慈眼の力を刹々塵々に現身せしめました、今日も俗間往々この小觀音像が珍藏されてあります、かくも了翁は衆生縁を縮びて般若の種を殖されましたか、唯だ他のために供する犠牲の我は、この歳の冬頃から頓

に老病に迫らるゝ様になつたから、天真院の住持職をば嗣仁峯に譲りまして自分は自得院に閑居せられました、この仁峯といふは了翁の門人數ある中の上首にて、諱は元善と申し姓は松田氏であります、幼にして道を求め、出塵の志ありしも、父母が出家を許さなかつたから、廿五歳の時始めて剃髮し京都北野の草庵に屏居せられ、只管念佛三昧を修せられたが三十二歳の春、初めて黄檗山に登り、高泉に謁して禪要を承當せられました、後、了翁の法を嗣いで黄檗禪を相續せられました、常に大黒天を信じ自ら其像を書き世間に施された人ですが、了翁と機縁相契ふて終生、師の影を慕ふて侍者を勤められました、天真院、佛國寺等に住せられました、了翁の歿後『天真院了翁禪師紀年録』『佛國了翁和尚語録』を編著して師の徳を表はしておられます。

了翁はまた例の如く仲金三百版を東叡山勸學寮の修葺料として寄附せられました元祿十三年の秋、了翁は老後の事業としてまた一つの志願あり八月江戸に上り、東叡山に到りましたが、此の時左胸に於て生瘡を患ひました、痛みて苦しく我慢にも衣

服を襲ぬる事も出来ません程で、醫藥も更に効なく、明年の春までも癒りませんです  
から、再び宇治に還りて自得院に静養せられました。  
元祿十四年七月六日、了翁七十二歳の夏、佛國寺の住持に請せられました、合山兩  
序を代表して道仙和尚、同門の總代として道香和尚等が懇篤なる疏を捧げて來ました  
のです。

了翁和尚の開堂を請する疏

伏して惟れば、佛國地靈にして將さに醍醐の聖跡に近く、天王山秀で、恰も鷲嶺の  
雄觀に同じ、主席已に三代を経て昌んに、衣盂皆な一門より出で、正し、恭しく  
惟れば、自得了翁和尚大禪師、台密禪、底に徹して探り盡し、經律論、力を極め  
て流通す、願、須彌よりも大に、遂に行じ難き弘願を成じ、慈、滄海よりも深く、  
普く施し難き洪慈を布く、芳名、陰徳と與に實に雙び彰はれ、時節、因縁と與に誠  
に並び到る、冀くば象駕を促し、來て猊床に據り、大に西祖の宗風を振て専ら北

闕の睿算を祝したまへ。

元祿十四年辛巳七月初六日合山兩序道仙等稽首、

伏して以れば幡頂の古關廣豁、諸方の俊裕、風を望んで奔騰し、天王の法席悠長、  
遮代の明師、衆を領して激發す、若し頂門の眼を具せずんば、争でか能く祖令の權  
を行せむ、恭く惟れば新命堂頭了翁大和尚、起家の宗匠、救世の薩埵、浮華を  
事とせず、縁に隨て閑伎倆を掃除し、實行に慚ることなし、力を竭して破沙盆を扶  
持す、豈に特に一門内外の光輝を増すのみならんや、抑々亦た同道古今の藻鑑とな  
る、直饒、劈佛の手を袖にすと雖も其れ陷虎の機を藏し難きことを奈何せん、久し  
く鐵を點じて金と成すの靈丹を煉て、冤親等しく利し、廣く凡を轉じて聖と作すの  
巧便を施して、棒喝交馳す、法の爲めに老成を辭せず時に乗じて、好選に膺るに好  
し、高く寶華座に登て、宜しく緇侶三等の嚴瞻を慰せよ、恭しく海岸香を蒸て、仰  
で紫宸無窮の壽算を祝し給へ時輩益を一頓棒下に獲るのみにあらず、先師も亦た眉

を三昧光中に開かむ。

同門道香等 同 和南拜

かくも熱心に請待せらるゝの情誼に感じ、且つは先師の跡なれば了翁は意を動かしたのです、時に衣鉢侍者が、先師高泉の遺命に因り、其法衣を捧げて到りますれば、了翁便ち先師の信衣を拈じて云く、

人々具足し個々圓成す、何ぞ傳授することを用ん、咄、然も恁麼なりと雖も頂戴受持の一句作麼生か道はん、慇懃に拈得して身に絡ふ處、簇々たる紅霞利塵に映す。快よく請待を諾されて、八月廿七日晋山す、祝國開堂の聖禮を嚴修せられたが、其

盛觀亦た一代の誇りでありました。黄檗山堂頭賜紫千呆曇瑞禪師は滿腔の祝意を表せられ、

佛國了翁法姪禪師繼席開法偈以慶賀併一咲、  
建哉踰七袞、力振古家風、廣布無爲福、護稱了事翁、天王常翼化、

佛國丕興宗、撞倒寶華座、慇懃祝九重、  
且つ厚く禮物を具へて使僧を遣はす、湛獨禪師も亦た、

了翁住佛國寺贈

素有菩薩行、今居菩薩位、廣度諸衆生、圓滿菩薩行、  
といふ賀偈を寄せられました。其他、客院の法叔、兄弟の諸禪師等、又、京兆興聖寺、賜紫の大徳寺、南禪寺や濟北院、東禪院、深草の眞宗院律師など、當時一代の宗將達が打揃ふて法筵に臨んで隨喜せられ、皆な異口同音に了翁の人格、功業を憧憬し讃歎せる賀偈を呈して祝されました。四方より集來れる雲衲は四百五十餘人、滿堂悉く信者を以て埋められました、伏陽官府の主事も亦た座下に來て了翁の徳を渴仰感賞せられました。殊に南都一乘院法親王より香帛並に左の賀詩を賜りました。

天王法窟聽諸方、殿閣輝煌接彼蒼、  
此日司權稱四代、少林祖道好恢張

了翁の光榮又頗る大なりといふべきであります、即ち了翁は天王山佛國寺第四代の住持となられたのであります。今、「了翁語錄」俗にいふ「開堂錄」に依りて當時の模様を想像するために禪門の規矩に準じたる法式を行ひし時、了翁の唱へたる法語を茲に抄録します。

了翁この日、山門頭に進み來り柱杖を以て山門を指して曰く、

一超直入、活潑々地、喝一喝して便ち入りました。

○佛殿にて、

鷲峰に說法し、這裡に身を現す、是れ同か是れ別か、更に第二人なし。

○伽藍を祝して、

靈山の記を受け、道場を鎮護す、無方の神力、稱揚爲し難し。

○祖堂にて、

西天此土、的々相承す、錯を將て錯に就く。

○開山堂にて、

昔時端なく這の老漢に撞着して、鼻孔を失却す、今日又兩重の敗闕を得たり、此恨み歴劫にも亦た忘じ難し。

○方丈に入り柱杖を卓して

這裡深きこと滄海の如し、廣きこと虚空に似たり、今日此室に據る、千聖も亦た窮ふこと難し。

○法座を指して、

諸人還て看るや、吾れ爾に隠すことなし。

○山門の疏を拈じて、

一褒一貶す、玉轉じ珠回る、請ふ衆に對して宣過せよ。

○同門の疏を拈じて、

堦籠合奏、調へ古り韻き高し。

◎祝聖しゆくしん

恭うやしく法堂はうたうを莊嚴せうげんし、須彌壇しゆみだんに上のぼり、謹つしんで栴檀香せんたんかうを焚たいて曰いはく

此この一瓣香いちべんかう、端たんに爲ために、今上天皇きんじやうてんなう、聖壽萬歲せいじゆばんざい、萬歲ばんざい、萬々歲ばんくざいを祝延しゆくえんし上たてまつる、陛下てい下か、恭うやしく願ねがはば聖明日月せいめいじつげつと齊ひとしく、叡算乾坤ゑいさんけんこんに等ひとしく、八方有道はつほうゆうだうの君きみと歌うたひ、四海無爲かいびみの化くわを樂たのしまんことを。

◎護法神ごはうじんを拜はいして、

緣ゑんに隨したがひ感かんに赴おもむく、普あまねく三洲さんしゆうに現げんじ、長ながく宗社そうしやを護ごして、群魔ぐんまを掃蕩そうたうす。

◎香かうを拈ねんじて師恩しおんを謝しゃす、

此この一瓣香いちべんかう、色しきにあらす、空くうにあらす、長ちやうにあらす、短たんにあらす、誰たれか肯あへて辨取べんしゆせん、爐中ろちゆうに蒸向せんかうして本寺開山ほんじかいさん前住ぜんぢゆう黃檗山わうはくさん第五世だいごせ先師せんし賜紫みし上高下泉じやうかうかせん大和尚だいがうに供養くぐやうし、仰あほいで法乳はうにうの恩おんに報ひくいんとす、(此時了翁しじりゆうは感極かんごく、潜然せんぜんとして涙なみだを涙なみだし、衣いを斂おさめて座ざに就つきました。

其その時とき、桃源和尚とうげんわう、白槌びやくつゝいして曰いはく、

法筵はうえんの龍象衆りゆうざうしゆう、當觀たうくわん第一義だいいちぎ、

すると了翁りゆうわう徐じゆろに云いふ、

龍象りゆうざう奔騰ほんとうし、人天際會にんてんさいゑす、還かへつて枝葉しえつを帶おびざる底ていありや、出いで來きたつて正見しやうけんせよ。

時に副寺ふうじ問とふ、正當佛國金仙しやうたうぶつこくこんせん現げんす、一朶いちだの曇華どんげ徧界香へんかいかうし、作麼生そりよんか是これ祝國庇民しゆくこくひみんの一いつ句く、了翁りゆうわう曰いはく、大唐だいとうに鼓つづみを打うてば新羅しんらに舞まふ、副寺ふうじ曰いはく、謂いつべし正眼流通しやうげんりゆうたうするもの

なりと、了翁りゆうわう曰いはく、且喜しやきすらくは閻梨共えんりともに證明せうめいすること、副寺ふうじ即すなはち禮拜らいはいして曰いはく、將まささに謂おもへり這個しやこの和尚わうしやうと元來當今げんらいとうこんの老南堂らうなんだうと、了翁りゆうわう之これを聞きいて嘘きよいつきよ一嘘いつきよした。次つぎに典座てんざ

が出て問とひました、四來しらいの龍象りゆうざう、猊床げいじやうを圍繞わにやうす、如何いかなるか是これ祝國開堂しゆくこくかいだうの一いつ句く、了翁りゆうわう曰いはく曇華どんげ一朶いちだ開ひらく。

典座てんざ曰いはく忽たちまち銅頭鐵額どうとうてつがくの漢出かんいで來きたるが如ごとき又また作麼生そりよん、了翁りゆうわう柱杖しゆくぢやうを卓たくす、其僧身そのそうみを轉てんじて曰いはく、天王てんわう第四代だいよだいと稱しょうするに堪たえたり、了翁りゆうわう喝かつ一喝いつかつして曰いはく把住はせうするときは則すなはち

真金色を失し、放行するときは則ち瓦礫光を生ず、有時は長河を攪して酥酪と爲し、有時は大地を變じて黄金となす、直に得たり高く彌勒の樓閣に登り、綴いまゝに法菩提場に遊ぶこと、正與磨の時、甚んの參禪佛法とか説かん、只太平の一曲如何が拳唱せん、獨角の麒麟海嶼に登り、九包の鸞鳳神山に舞ふ、(復云く)山僧の天性、人情に合はず、況んや又老病相侵し、只深く巖谷に藏れんと欲す、詎んぞ料らん諸昆仲の推舉を蒙らんとは、因縁相逼て廻避するに路なく、曲て人情に隨て方に斯の席に據る頼む所は同門の耆徳、合山の昆季、力を盡して、成褫し、襟を虚にして輔弼すること、若し大事因縁を論せんと欲せば、老僧元來口門窄まし、(柱杖を卓して曰く)頼ひに這個の在る有り、久立珍重、

了翁がこの語を唱へ了りし時、桃源和尚起て結槌して曰く、  
諦觀法王法、法王法如是、

其晩、禪門に於ける大問答がありました。七花八裂、了翁は大衆に抱擁せられて大獅子吼せられました。

子吼せられました。

夫れ學道の要は其志を立つるに在り、其志堅きときは則ち何事か遂げざらん、何の願か成せざらんや、今日の一會、是れ小縁にあらず、人々互に勵まし、個々相扶けて、心性を發明し、當さに佛恩を報すべし、且らく道へ、報恩の一句作麼生、(了翁遂に拂子を以て笛)曰く倒まに少林無孔の笛を把て、逆風に吹きて了て順風に吹く、更に一偈を聴け、因縁熟する處、免れず名場に坐す、頼に麟龍の會するに遇ふ、門庭自ら光有り。

開口一番、向上底を拈じ向下底に徹す、雲飛び、水流る、學人の揮ふ殺人劍、師家の翳さす活人力、龍攘虎搏の壯觀は黄蘗宗史の美談としてあります、かくて活問活答が畢て大衆は了翁の勞を拜謝する時、維那が出で、問ふて曰く、龍、水を得るときは則ち靈有り、虎、風を得るときは則ち威有り、只だ兩序、人を得るが如き何の威靈か有る、了翁曰く、意氣有る時、意氣を添ふ、維那曰く梅檀林に雜樹なし葉々香風地



を匿る、了翁云く大家共に氣を出す、維那即ち謝拜して曰く、龍能く雲を起し、人能く道を弘む、叢林人有れば綱目自ら正し、且喜すらくは麟龍の今際會することを、追ひ回へす萬口少林の風、了翁、欣然として座を下りました、此等の商量は唯だ了翁が人氣と禪機の一端を現はして居ります。

越て十月十五日に至り結制を修せられましたが、其時、上堂の香語を唱へられました了翁の意氣が窺はれます。

佛性の義を識らんと欲せば、當さに時節因縁を觀すべし、時節若し到れば其理自ら彰はる、今日時節到來し祖苑春回へる、直に得たり圓覺堂中曇華の瑞を現じ、天王山上無盡の光を生ずることを、正當恁麼の時、人々言を忘じ、個々欣然たるのみ、然も與麼なりと雖も結冬安居底の如き作麼生か道はん、滿堂の聚會皆な麟鳳、賓主機投じて共に讓せず、たとひ縦横罣礙なきも、好し蒲團を伴ふて歳寒を凌ぐに。

翌七日には先師開山高泉禪師の七回忌を修せられましたが遠近の法類咸く來て隨

喜し盛大に供養を勤めました。了翁は既に七十餘の老境に入りたるも法のため、且つ佛國寺のためにせんとの精神は毫も衰へず、老病を顧みず、身命をも忘れて之を勵みました。江南湖北の雲衲水衆や知識達も其の道力に感じて、一會九旬の間、七百餘員も常在して補佐せられ、法鼓の響鬨々として山に振ひ、唄歌梵音朗々として水に聲するといふ有様、山河色を増し、佛國春回つて觀を改めたりと世人が申された。是も皆な、了翁が幼少より脱白し、常に行じ難き處を行じ、枯淡に甘んじ、疎服粗食、唯だ菩提のためには一身をも慮らず、但だ利生の法益とさへあれば奮つて修し來れる七十餘年の行持力に依つたもので、時節因縁、福も得られ、徳も備はり、其志す所の興造納經の大願も悉く成就する様になつたのであります。此の冬例の如く黄金若干を捨て、新らしく後門の石階及雙坊の塀をも造りました。

元祿十五年、了翁が七十三歳の時、多年の沈痾も悉く除きまして身心益々強健になりなりました。正月十五日結制を解き雲衲を分散せしめましたが、了翁も我壽命の餘りなきことを直感せられ、最後の計を立てました。蓋しこの佛國寺は本師高泉の開所で、伏陽第一の勝藍であります。僧糧田が不足のため、法幢を建て宗旨を振ふに頗る不便であるから、今より吾は一層清約を守り、毎歲中金一百版づゝを剩し、五百版に満ちたならば佛國寺永代の香華料とせねばならぬ、既に食輪が轉ずる様になつたならば後來の住持が法輪を轉ずるにも利便であらうと、俄かに衆僧を減じ自ら身を儉して簡易生活を續けました。新に山門外の堀凡そ九十餘歩を造り、其他修葺すべき所のものは、咸く之を整頓しました。功成りて身退くは即ち道なりと謂ひ、法兄なる大隨和尚を請して佛國寺の席を譲り、八月朔には退院上堂の式典を行はれました。去年此に到るや流水海に朝す、今日院を辭する時、浮雲山に歸る、一來一去、元より縦由を絶す、唯だ鐵釘飯を除して、大衆に供養せんと要す。

一喝二喝の後、後進の路を開いて了翁は、飄然として佛國寺から、懐かしき自得院に還りました。翌、元祿十六年には獅林獨湛和尚のために報恩として、僧料中金五十版を捨てられ、又、法苑院には高泉禪師の塔所あればとて中金五十版を寄附して永代の香華料に備へられました。又、中金壹百版を揮ふて本山の門側に「省行堂」といふものを建て、藥物醫具病室等を設備して天下の病僧又は病弱に苦しむ人々のためにせんと謀りました。是は彼の聖德太子などの芳躅を慕ふて施藥施療の福田を耕やさんとの慈悲業であります。

寶永元年、了翁七十五歳の春二月の事であります。嗣法の徒了山をして、了翁が曾て再興したる徳大寺に住持せしめました。其前、癸未の冬亦復江戸に大火災がありまして、燎原の火遂に東叡山に及び勸學寮をも焼き拂ひました。此の報知を聞きし了翁は忍俊の情に禁えず、病軀を提げて江府に出で、自分が腰に巻きし涅槃金を捨て、一日も早く之を重興せねばならぬと焦心苦慮せられました。了翁が昔、此の勸學

寮を搦建して以來、諸宗の學人競ふて來り遊び學風中々盛大であつたが特に天台の學徒の如きは此を以て立身出世の道場とした程であります。されば東叡山の主事も亦た了翁と協心戮力して之を再建せんと欲し、之を法親王へ稟しあげたるに法親王は早速僧官に命じて、之を閻老に謀りました處、綱吉將軍も了翁が年來護法獎學の志を悲しみ、直ちに重興すべき事になりしのみならず、且つ勸學寮は永久幕府が之を保管すべしとの特典をも與へられました。了翁出府、先づ東叡山に謁し知事と此の儀を相談せしに、知事既に勸學寮は公建許可の台命を頂きたる盛事を告げれば、了翁頗る其の恩に感じ、法親王に御禮を申し上げました、法親王長くも了翁を延見し親しく遠來出府の勞を犒ふて、特に齋を設けて饗せられ且つ白縞紗二疋を賜はりました。了翁は神佛の加護に依りて夙願を虚うせざるを喜びました。了翁が佛國寺に住持したる關係より伊達陸奥守とは、格別の恩誼を葬り居たれば、這回も出府の因み、陸奥守の館に謁して謝意を述べ、本師『高泉禪師語錄』を贈呈せしに、大守も非常に悦んで翌

日態々使を遣はして紋絹、海菜を賜はりました。

かくて了翁は焼くが如き夏の日、飛んで法衣を汚がす都の紅塵を拂ふて、山青く水清き洛陽に歸らんとする途中、思出多き多賀明神に詣りて昔日掛けたる宿願の榊が根となり幹となりて其葉蓁々たるを謝しました。この時、澤山城下の掃部家にては豫て了翁が弘法の美志を景慕しつゝありしかば、此の機會を幸ひに了翁を請して渥く供待せられました。此夏の中頃恙なく自得院に回られました。

了翁の生活は頗る單調で常に山水を翫ぶなど、いふ風流癖は斷てなかつたが、久しく峩山の勝概が天下に並ぶものないと云ふ事を聞いて居つたから、一日登臨して直指菴を訪ねました、月潭和尚は珍客の來訪を喜んで慇懃に歡を交はされました。なる程この峩山は聞きしに勝る風景で、境靜かに林に風なく、溪深くして幽邃の處、猿啼いて露は中宵の月を濕ほす僧家の安居、見るべく、語るべく、以て住心地の好きまゝ、了翁は悠々一日を坐談せられました。後日、月潭が佛國寺に來られし時、了翁は直

指庵の人境雙絶は開堂地とするに足ると賞められ、則ち銅鐘一口を鑄て寄附せられ、了翁が峩山よりの途すがらゆくりなくも雙びヶ岡を過ぎました。此の雙ヶ岡は彼の徒然草をもせし謙好法師が『誰が植えし花とならびが岡の邊にあはれ幾世の春を經ぬらむ』と閑居せし處で、そこには齊雲禪師が居られました。了翁と懇意の間柄なりしかば、即ち柴の織戸を叩いて舊情を温められました。難兄難弟意氣相投したる二人は、終夜胸襟を披いて過ぎし日の幻影を追ふて語り明かし鶏の聲に驚かされました。此の夜談たま／＼如定和尚の事に及びました。了翁の夢物語に感動したる齊雲は特に書を長崎に飛ばして、素文禪師に如定の事を詢合せられました。やがて素文からは如定の生縁等を報じて來ました其に依りて、

黙子如定は江西建の人、姓は陳氏、明の神宗、萬曆二十五年五月二十六日に生れ、本朝の明曆三年十一月三十日寂す壽六十一といふを確むることを得て了翁は非常に喜びました。

天王山の附近に古蹟なる西照寺といふ日蓮宗の寺がありました。その寺主は了翁が興造の大願あるを知つて居たから、此寺を了翁に寄贈せられました。了翁其の志に感じて之れを受け開山地とせられました。嘗て志源懷王禪師が高泉禪師の筆跡なる『西照寺』といふ額を持って居られしが、了翁今偶然にもこの西照寺を得たるは亦た奇縁なりとて此の額面を了翁に送られました。是が天真山西照寺であります。

了翁七十六歳の春即ち寶永二年三月、黄檗山六世千呆禪師は將さに席を悦山に譲らんとしました。此の千呆と云ふは諱は性安別に曇瑞と稱します。即非禪師に隨ひて東來し初め長崎の崇福寺に住して居られました。天和元年了翁が長崎に抵り興福寺の如定を訪問して、如定から曾て送れた三聖銅像の禮を述べし序で、崇福寺に千呆禪師を尋ねました。此歳國內大饑饉でありまして、貧者病者飢者が到る處に倒れ食を求めて慟哭して居つたから、千呆は自分の法衣袈裟、鐘も太鼓も賣拂ふて是を救はんとして居りました。了翁いかで之を座視すべき便ち黄金五十兩を千呆に提供したるに、千呆

は了翁と謀りて治工をして大鍋を鑄さしめ、崇福寺の門前に据え、小豆粥を煮ること一鍋一石づゝ施行せられた。日々往來の人々が此の施粥を受くるもの萬人以上に及びましたから世人は之を稱して『萬人鍋』と呼ばれました。元祿九年高泉の跡を繼いで宗風を宣揚せられ、一住十年了翁等と共に經營する所甚だ多かつたのでありますが、悦山和尚を引いて黄檗山を退かれたのであります。

黄檗山第七世となられた悦山禪師は道宗と稱し、明暦三年來朝せられた人でありました。隱元の命を奉じて新黄檗の建設に力を盡され名聲夙に噴々たるものでありました。今茲、晋山せられ尋いで紫衣を賜はりました。時恰も隱元國師の三十三回忌に逢ひましたが、其餘徳を慕ふて襦子は四方から雲集せられ皆な香を獻せられました。而も黄檗山の常住物は餘り豊饒でなかつたから、新命禪師が江戸から發駕して入山の日も近づいたにも拘らず、準備は未だできぬといふ不始末を聞き、了翁便ち黄檗山で要する齊茶の料を補はんが爲めに、自得院の年税をも提供して其盛儀を滞りなく修せし

めました。且つ九旬安居の大衆を供養するの費用も了翁が進んで負擔せられたから、黄檗山の知事は了翁の厚意を感じ大衆も了翁の徳を謝しました、悦山が入寺の後、斯の事を聞き稱嘆して止まず『我が友了翁は檗山の護法神なり』と申されました。この歳、了翁は弟子元善に命じて江都に行かしめ、輪王寺法親王に稟しあげて、東叡山勸學寮内に別に客院を建て、了翁及び天真院主が永久出府の時寓所とするの允許を得ました。

十二月初旬、靈元上皇から了翁の師なる佛國寺開山高泉に、大圓廣慧國師と御勅諭號が賜はりましたに付、聖恩報答の慶讃會を舉行せられました。了翁は自分の本師が今日の榮譽を得たるを喜び、便ち中金五十版を投じて其用途に充てました。同月二十日、宸翰山門に到達せられ、現住大仙和尚は恭しく禁闈に伺候して御禮を奏上せられました、猶ほ桃源琛州和尚をして江都の幕府及閣老にも謝意を表せしめんとしたるが、琛州は其頃病床にありて起つこと能はず頗る開山國師の恩に辜負すること

を遺憾とせられ、了翁を推舉して其大任を托されました。了翁近來老病に苦しみつゝ、ありしも師のためとあれば何事をも辭せざる底の漢、蒼顔瘦骨を憚らず遠路風雨の難をも厭はずに突降る五十三驛、頭巾寒く江都へ赴きました。寶永三年正月、了翁は喜宇の壽を江府に到つて迎ひました、即ち瑞聖寺寶洲と同伴して諸閣老及僧官の所に謁して、開山國師のために申謝しました。一日松平濃州公の第に造りたるに濃州公喜んで了翁と相見せられ、白絹綿子を賜はりました、了翁は東叡山に到り先年元善に命じて勸學院内に建て、木の香新しく匂ふ客院に旅装を解かれましたが、京極甲州公佐竹羽州公など高泉國師と因縁のある諸侯は時々了翁を延いて供養せられ、其他宰官居士等は了翁が一見愚の如く魯の如き樸實な護法心に感鳴して渥く共に款待せられました。

了翁は久振りに勸學院に到り四來の學徒が學道の模様を參觀せられ非常に喜びました。了翁は兼てより勸學院に千人を養成するに足るべき僧糧を寄附せんと欲し、平素

頗る儉約を守り身には綿布の外は着けず、口は麥飯粥に青菜汁、纔かに露命を支へて居るばかりに清く、貧しく活計を立て、居りましたが、輪王寺法親王之を聽召されて益々慈愛を加へ賜はりました。然し了翁は此頃に到り老病日増に悪くなりしますので藥師寺宗仙法印などは時々良藥を贈られました。此の宗仙は佛國寺現住大仙の俗叔でありまして了翁とは舊誼深かつた人であり、

了翁は老病身に纏ふをも念とせず、例の如く亦復、佛國寺僧料として中金五百版、徳大寺、天真院、自得院、西照寺等、自分が開基の寺々に中金各々四百版、更に佛國寺の五末菴即ち志源菴、桃源菴、普賢菴、心空庵、咲雲菴の五ヶ所に中金各々壹百版づゝを寄附せられました。

斯の秋、了翁は曾て師の高泉が加賀の猷珠寺に住して居つた頃、加州宰相から蒙りし舊恩を謝せんがために、藥師寺宗仙に托して高泉語録を贈呈したるに、宰相も亦た喜んで了翁を延見し若州郎君と同座にて供養せられ、且つ白綿十疋紐苔一箱を贈られ

ました。

(十二)

世は寶永四年の春となりて、一陽來復の光が天地を明かに照らす様になつたが、了翁の身心は春に背いて漸く老朽を覺ゆる様になり、軒端の梅に嚙づる鶯の聲も今は耳にも入らず、陽氣の催うすにつれて其身の氣力はだん／＼衰ふる程に、諸縁を放捨して了翁は二月下旬、霞と共に江都を立つ事に致しました。弟子了山をして法類知己を訪ふて別れを告げました。京極公の如きは別離の情に堪えずとて綿子茶器などを餞けられ、法類知己も皆な驢けせられました。廿八日江戸を出で菜の花續く信州路より湖玲瓏なる江州に到り、水の聲聞きつゝ雲雀に暮れて、彦根なる、了山の生家清水氏の宅に宿りました。特に了山の父母に逢ふて進善懲惡を勧め、一子出家の功德は九族天に生ずるの佛縁を説き、今世は安穩、後世は善處の義を論されました。『瘦蛙負ける

な一茶こゝに在り』我れ人の子を我が子として養育する上は、腹を痛みし生みの親心御兩親よ決して心配し玉ふな、了山子は多年、此の了翁を師父と頼み、乳を探ぐる手にて薪を刈り水を汲み、父母を呼ぶ聲にて經を讀み佛を拜む、いちらしともいぢらしきも佛道の修行は人情は許さぬ、叱りもした折檻もしたが、叱れば叱る程、打てば打つ程、手をすり足をする温順な了山子、我を扶くる所頗る多きも頼まれ甲斐のなき了翁は未だ御兩親達にも満足を與へかねて居るが、他日必ず渠れに負かぬ様に取計ふべければ、了山子の行末に就ては一切この了翁にお任せして置かれよと人情切々肺腑に徹したる言葉には了山の父母も唯だ涙を流すのみで、一夜の別れを惜みました。かくて途中恙もなく三月十日宇治に着き自得院に歸られました。が佛國寺は醫藥に便利な處であるから暫くこゝに寓居して保養せられました。大仙和尚は道愛を傾けて能く了翁のために世話せられ高森正因の治療を受けられました。了翁の壽命も刻々日々に縮む様に病勢は進みましたが、尙ほ且つ興造の願力歇ま

す、今年中には佛國寺の前門後門を建て、禪堂を再建し屋根は皆瓦葺にせんと欲しま

した。鳥の死なんとするや其聲悲し、了翁今や死の宣告を眼前に聴きながら従容として其雄心を逞うしてをりまする。一日弟子元善を呼び語つて云ふ、於戲天我に假すに數年を以てせば佛國寺の伽藍は次第に以て建立すべきも、我れ衰病恐らくは遂ぐること能はざるべし、只因縁に任すより外なかるべし殘情に禁えぬぞとて暗涙を流がされたれば元善も貰ひ泣きして座に崩れました。加洲太守了翁の病態を聞て打驚き使者をして問候せられました。

四月上旬

了翁は弟子等が切なる勸めに依て洛東の小庵に移り療養せられました。一日弟子元善を枕頭に招ぎ懇ろに滅後の事共を遺誡せられました其言ふこと誠に了翁の大慈悲を實地に現はして居られます。

天真院は我が開基の所なれば、本院の兒孫聚會すべく、備能く之を蔭涼せられよ、我に代りて永く法愛を加へてくれよ、彼の江都の藥舗は備が管理してより逐年繁昌

し其の御蔭によりて老僧の大願は全く成就した。唯だ備等に申譯なきは老僧が餘りに興造納經の念願を急ぎしたため、天真院の受用金も弟子了禪や大珠や葛民に建て、くれた所の寺庵等は未だ、其力及ばずしてそのまゝになつたが何日か之を償ふてやりたいと思ふて居つたのだから備之處置してくれ、西照寺は老僧手づから闢きし處なるが伽藍竣成の曉には弟子了禪をして視察せしめてくれ、佛日寺別傳和尚は老僧が昔普門寺に在りし時代より法愛を蒙つた舊參の友なれば我滅後には別傳和尚を師父と仰いで大小の事之に諮詢して行なへば過失なかるべし。弟子了湖は侍者として十數年、我が左右を離れずに忠實に勤め頗る孝念の厚きものなれば、我が開基の圓通庵を縁に任せて住持する様に斡旋してやれ、と親念切々の痛腸より出づる言々句々には唯だ『諸々』といふて辭なく、元善頻りに悲涙の襟を濕はうを覺ゆるのみでありました。

寶藏雪和尚、佛國仙和尚、聖恩海和尚、志源懷公、普賢都公、桃源中公等の諸大徳は時々了翁の病氣を問候せられ瑞光越岸、華藏梅宗、萬松拔宗等の禪師は斷えず菜菓



を贈られました。了翁は平常の如く談笑せられて居りました。

五月四日悦山禪師は黄檗山の席を悦峰和尚に譲りて退休せられ、同月十一日晋山の禮典を擧げられました。了翁は元善を代僧として賀表を致させました。悦山悦峰の二禪師も打揃ふて駕を枉げて了翁を病床に問候せられました。佛國寺の大仙和尚は了翁の病勢を慮り、別醫をして診察せしめんと勧めましたが、了翁は唯だ其好意は難有と領づき密かに元善に告げて云ふ、爾等心念を勞すること勿れ我病別に變りなし。若し我病を問ふものあらば日頃輕快なりと答へよ。妄りに他人に心配を増さしむるも何にかせんやと元善唯だ師の覺悟を聞いて落涙するのみであります。

斯時、羽州の郷里、八幡村のものにて某といふが久しく了翁の徳望を聞き景慕の情に禁えず、親しく了翁の舊識なる洞宗の拙童長老の紹介を得て、其の弟子となりた。いと願出で、長老と共に得々として師を千里の外に求め、宇治まで到りました。十九日了山に就いて懇ろに出家を望みました。了翁快諾せられたが此時は了翁既に十數日

も絶食して居つたものです。から氣力も衰え居りましたが、剛て威儀を具して得度の式に臨みます。から、了山は之を略して頂きたいと申したるに、了翁微笑して曰く、是れ我が最後の剃度なり釋尊の陳如に於けるが如しと法衣を着け剃力を執りて祝髮し、靜かに流轉三界中恩愛不能斷。棄恩入無爲眞實報恩者の偈を唱られました。次に三皈依をも授け手づから法諱を安じて了也と書かれました。

了翁が最後の剃度たる此の了也は郷里に一人の母を残して出家したものであるが、夙に黄檗の禪源を探り臨濟の宗風をも聞き更に曹洞宗に皈嚮せられ、了翁の滅後は彼の有名なる面山禪師の禪門を叩いて侍者となられた程の人であります。了翁は師の了翁に別かれ雲遊萍寄の後、母の望に従つて、且つは了翁在世の因縁を攀ちて秋田の天徳寺に掛錫して居られました。餘程面山禪師からは可愛がられた様で、面山が遙かに左の如き詩を寄せて了也を策勵せられて有ります。

了侍者從羽州贈書說之而答

瑞芳面山

了也羽州産

巾瓶千餘日

病身雖羸弱

志氣匪瑤瑗

一一四

曾受木叉後

進道不超起

粉里老母在

杖鞋訪舊廬

名孝即爲戒

不可比冰魚

法恩千里外

慰我贈雁書

爲其渴想切

剝封幾卷舒

聞掛錫天德

動靜宜一如

又告讀智度

不徒度居諸

三昧王三昧

光明照十虛

非但龍猛一

佛祖之所於

用茲爲模範

心田須稷鋤

澆季法幣極

隆興專勤歎

願力等鐵石

莫毫伴莊樗

老衲日西昃

山水憶退居

旅泊莫忘好

長者有大車

此日正午、了翁は大衆に告げて曰く

我れ身心頓に衰弱したれば命も亦た旦夕に近

づきしならんと想はると、翌廿二日了山に命じて日光法親王の象駕を京都に迎へて伺

候せしめました、了山回つて備さに法親王の御辭を了翁に傳へたれば了翁頗る感喜せ

られました、元善が了山と相談して當時名高き御典醫たる中山柳田の二伯に請ふて師

の壽命の一日たりとも長からしむる様謀りたるに、了翁之を聞き叱りつけて曰く我

病既に革まる少水の魚の如し薬も食も要らぬぞと衣を整ひて端坐せられました、了山

驚愕して直ちに遺偈を請ふ、了翁手を振つて『無用々々』といふ 了山強て筆を以て之

を過せば、了翁便ち一圓相を書き其下に咄咄咄二十二日了翁書と筆を擲ちぬ、弟子共

が泣いて遺教經を讀む方丈の間 香煙絶ゆる處、晏然として坐脱せられました。

是より先了翁は豫め元善に命じて黄檗前堂頭悅山禪師は本師高泉と因縁深く兄

弟之を本師の如く敬仰して居つた故、老僧遷化したならば、葬儀の時は秉拂の導師を

悦山に願ふべく其他の事共まで細々と遺囑せられました、廿五日、本葬を營みました

が天下の善知識を初め洛陽の善男善女、緇素の別なく雲の如くに集つて了翁の盛徳を

壯嚴せられました、時は梅雨の節なりしが天晴れ地澄みて靜かに斯の偉人の安眠を

護りました。

了翁が年來渡したる弟子は五十餘人、其中、大法を嗣ぎし者二十餘人あります、了

翁の在世既に袈裟、衣服、履鞋の果までも悉く弟子共に分與しましたから、遷化の時唯だ竹篋一本と古掛絡一肩のみより残つて居つたものはありませんでした。享年七十八、法臘六十八、寶永四年五月廿二日(大正十年を距る)の示寂であります。

(十三)

今の佛國寺

了翁が興造弘經の大願力を立て、伽藍佛法を莊嚴したる佛國寺も物換り星移りて桑田海と變ずる今日此頃の現狀は阿部道山氏の旅行記の一節でもわかるのであります。翌日私は佛國寺に行つた、連日の雨も歇んで空に一點の雲も見えない、太陽は朝から京都の街をじり／＼照りつけた、加茂の清い澄んだ水が涼々として街の中を流れてゐる、私はこの河の濶を走る京坂線に乗つた、車中色々開展されてゆく名所を話されたが私は只だ、うなづいたばかりであつた、私は伏見で下車した、そ

して大龜谷村に向つて歩を進めた、汗がそろ／＼しみだした、この村まで来たが佛國寺がどうしてもわからない、折しも駐在所の前に出たのでこゝで聞いて見たが、そんな寺は知りませんと云はれた時、私は巡査の顔をうらめしく思ふて見た、私は涙の出る程悲しかつた、然し寺は裏の小高い山の中に在つた、十軒ばかりの古びた農家を通ふて佛國寺に着いた、山門の兩側は生垣で四五間つゝいてゐた。苔むした石段を上つて門の前に佇んだ時、何とも言ひ知れぬ感に打たれ、漸く自分を忘れてゐた、門は小さい修繕としてした事もないらしい、この門に二つの聯があつた、私は判じ／＼讀むことが出来た。

四衆雲奔朝佛國 (右聯)

萬山玉立護天王 (左聯)

沙門高泉書

筆蹟鮮かにかゝれてあつた、此信念この氣概を持つて迥か故國を去つて渡來した高泉禪師を忍んだ、山門を這入ると、純明風のさゝやかな經藏があつた、荒れるに任

せてある、書籍は藏せられてないらしかつた、この前の一丈六尺もあらう傘松が昔ながらに青々とその緑を保つてゐる、左に庫裡、前に本堂がある、周圍は檜の林で、彬々としてその静寂をます、私らは庫裡に入った、そして案内を請ふた、寺は無任で留守番として御陵守の夫妻と十六七の娘ばかりであつたが、私らを歓待して呉れた、特に此の奥様は病後であるにも拘らず心から私等を迎へ此寺に就いての知つてゐるだけの事を話して呉れたのには感謝してやまない、此の庫裡に木庵の額が掲げてあつた、もう大へん燻つてゐた、『應供』の二字で黄檗木庵書としてある、珍らしいものである、高泉木庵ともに親交があつたことが推せられる、私は娘さんの案内で本堂に入つた、全部瓦でひき詰めてある、本尊は釋尊である、私はこのすさびゆく堂の中に靈元上皇の賜つた寺額が立派に保在せられてゐるのを視て嬉しく思ふた、『大圓覺』の三字がその額に刻されてゐる、この寺は諸君も既知の如く高泉の建立せる所であるが、靈元上皇が如何に彼に厚き信仰をもたれたか

左の二つの勅文に依つても知れよう。

(前略) 朕屢々宗要を問ふて深く法恩に霑ふ、眷々服膺して旦夕諉れず、故に特諡して大圓廣慧國師と曰ふ以て天下後世に示す。

寶永二年十二月十六日

朕、昔屢々佛國開山高泉知尙の宗要を提誨することを聽くに醍醐を飲むが如し、曾て諡するに徽號を以てす、茲に三十三回諱に値ふ、爾相に羹糝し爾風を龜鑑とす、庶幾は曇華の瑞、像季に現じて再び茅靡尼幢、山河を照し、以て盡くること勿れ、故に褒獎を加へ佛智常照國師と諡す。

享保十二年十月一日

堂の中に高泉と隱元の像が安置されてゐる。どんなにかその當時盛んであつたであらう。追想するだに信仰の力の動くを覺えた。本堂の側に高泉の碑がある。これが有名な銅碑であつて、一丈餘もあるが現に國寶となつてゐる。(中略) 敬仰すべきは

高泉其の人の人格である。佛國寺は高泉にとつて最も由緒淺からざる寺である。黄  
檗山としても見逃すことが出来ぬのは禪師である。殊に皇室とも關係があるのである  
今、佛國寺は事實に於て無住である、若し現在のまゝで置くなれば廢墟の運命遠か  
らずである。

而して了翁の石像及び記徳碑は今も現存してあります。

(十四)

仁峯元善が師なる了翁のために『天真院了翁禪師紀年録』及『佛國了翁語録』とい  
ふものを編してある事は既に述べた通りであるが、此等の二録の題、序、跋を書かれ  
てある千呆禪師や道香禪師、別傳和尚等の文を茲に録して了翁の人となりを考察する  
ことに致します。

原るに夫れ大豪傑の世に出興するや、法を弘め生を利するを以て懐と爲して、從上

の綱宗を荷ひ、人天の眼目を闡かしめずといふことなし。然して後、蓋代の功を立  
て蓋代の徳を立て、蓋代を言を立て、蓋代の名を立つ。斯に由て天下の人、之を讃  
し之を頌す。千古萬古と雖も其の功徳の大にして天地に充滿せるを以て、終に磨滅  
すべからざる者なり。茲に天真法姪了翁覺公といふ者あり。本と羽州の人なり。蚤  
に世綱を脱し徧く諸方を叩く。頃年、縁、佛國の高和尚に契て面門を印破せらる。  
公素より大願あり。道場を各所に建て、藏典を諸刹に安ず。世の謂ゆる美事といふ  
もの皆な勇んで之を爲さずといふことなし。年來衣鉢の資を罄くして、祖山の伽藍  
を修葺して輪奐美を成し、山川觀を改む。厥の功、厥の徳、詎んぞ異ならざらんや  
誠に大豪傑たるものに愧ざるなり。茲に門弟子、公の紀年録を撰して將さに梓に壽  
して用て其傳を廣めんと欲す。持來て予に序を請ふ。予曰く公の豐功茂徳、口碑に  
載す。天下の人之を知ること已に久し。爰ぞ予の序を竣つて、後に傳へんや、請  
ふてやまず、遂に之を書して以て其の意を塞ぐと云ふ。

元祿十三年龍飛庚辰正月 上元日

黄檗第六代賜紫千呆和南願指丈室に題す

夫れ頼綱を末流に起す者は願力須らく大なるべし。願力大なれば則ち徳從て彰る。正令を今時に行ずるものは解行須らく明かなるべし。解行明かなるときは則ち魔も撓すこと能はず。水長ければ船高く、泥多ければ佛大なり。其來ること自ら依ること有り。今時願行兼全き人を見んと要せば、吾が了翁和尚覺公是なり。公、童貞にして白を脱し、天性超倫、一日千里の勢あり。年長するに及んで、徧く諸宗を叩き磔を噛み氷を飲み、陰を斷ちて指を燃し、大心を發し、大行を行じ、刹を建て僧を度し、窮を賑はし藥を施し、寶藏を各處に安ず。宜なる哉世を擧げて菩薩の再來と稱すること、末後、黄檗先老人の室に入て、機語相投じ遂に印記を受け、第を山中に葺き、光を韜み彩を鏤す。咸謂ふ、必ず大法社を得て之に處らしめば、乃ち克く其の施設に稱はんのみと。此頃、佛國席虛し、同門相議して延て第四代の補處

と爲し、衆の爲めに開法せしむ。乃ち圓覺の堂に登り先師の座に坐し、塵尾一たび揮へば四衆雲の如くに會す。之を榮とせざるることなし。謂つべし願力大にして頼綱を起し、解行明かにして以て正令を行するものなりと。其徒、天真に住する仁峯善公、師の廣傳を選んで版に鏤めて世に傳ふ。題して紀年録と曰ふ。録を寄せて余に示す。意ふに余が言を得て以て其首に引たらしめんと欲するならん。嗚呼、余と公とは法の昆季たり。一門に出入すること亦た年有り。余を知るものは公、公を知るものは余なり。豈に敢て固辭せんや。然りと雖も其徳以て衆を服するに足り、其行以て世を訓ゆるに足るもの、安んぞ余が一詞を贊することを庸んや。

元祿十四年歲次辛巳九月穀旦

奥東の開元丈室に題す。碧落道香雪村和南

予、法姪了翁禪師の紀年録を觀じて、覺えず節を撃つて嘆じて曰く、予實に法姪を識ること歳舊し。嗚呼、儉以て已を持し誠以て人を格す。人を格するは易く、以て

事を集め已を持すれば率ね以て物を動す。是の二者を合すれば何ぞ之の不裏を願はんや、何ぞ之が不興を廢せんや。夫の大法藏を處々に建て、精藍を修補し、窮乏を振濟して致々として及ばざるが如き、然も行業負かに常倫を出で、未だ此に臻り易からざるものあるにあらずんばあらず。彼の尸位素餐の者の如きは愧づべきかな。愧づべきかな。因みに數字を卷末に盡して舊誼を訂すといふ。

元祿十三年歲次庚辰春王正月穀旦

廬山野禱別傳經、五老峯下に書す

噫、是等は皆な眞に了翁が知己の言々句々であります。了翁の眞面目が紙上に活き、文中に躍つて居る様であります乎。

因みに記す、二三の書には了翁始め祖休と稱し後に了翁と改めたる事をいふが、『紀年録』には始め『了然』と申し後に了翁と改むとあります。了翁の生家たる子孫は今なほ現存し由利氏を姓として居られます。了翁が遊化中仙臺地方には度々往來して

居る様ですが、今日該地方に何等の遺蹟らしきものも見當らぬのは甚だ残念です。了翁と伊達家とは佛國寺に就て師資の關係もありますから、了翁が佛國寺へ晋山したる時、殊に上堂拈香して、此の香、本寺大檀那奥州大藩主左近衛中郎將勝の綱村公のために上る。福壽を増延せんことを、伏して願くば永く黎民の父母となり、長く保社の金湯とならんことを、と平生の交誼を謝して居られます。

(十五)

これまでの記傳を透して私は、我が了翁禪師の人格や功業を中心から憧憬するものであります。惟ふに了翁其の人は全く頼る所もなき孤兒より出で、遺兒となり棄兒となり不祥兒となり、世の虐待の苦味を満喫したる、悲惨なる境遇より所謂、暗い暗い死線を越て探り得たる光明は、人生の内面生活を豊饒にして、慈悲と涙を無限に所有する菩薩の權化となられたのであります故、一代の事蹟はかゝる鍛鍊にて成れる

一 大人格美の投影であり、餘香であるのであります。

今、了翁が僧侶として、人として踏み來れる、信仰の道程を尋ねて見るに、初め曹洞宗に入りて髪を剃り、中頃臨濟宗に轉じ、或は臺密禪兼學の門にも遊び、遂に黃檗禪に趨りましたのであります。俗に禪三宗と謂ふも黃檗宗の如きは元來臨濟宗の一派に過ぎぬもので、唯だ隱元の人格が一家風を起し一新旗幟を建つる様になつたのであります。隱元の禪風に關しては世上是非の批評もあるが、賛否は問題外で、兎も角も從來情氣漫々の禪界に清新の空氣を注射したる事は疑ひありません。隨て臨濟曹洞二宗とは其習儀の上に於ても相異なる所もあるけれども、禪としては釋尊嫡々正傳のものであります。隱元が明末の禪風は直ちに當時の臨濟曹洞二宗にも大なる反響を與へまして、在來の宗風は尠からぬ別調を帯ぶ様になりました。殊に黃檗禪の特色ともいふべきは、平生念佛を稱へることでありますが、其念佛は普通にいふ處の念佛とは大に意味が異つて居る様です。行持として必ず伴ふ黃檗念佛は所謂教禪一致の立場

から來て居るもので、通佛教の根本義は言ふまでもなく、戒定慧の三學であるが、經は定を詮し、律は戒を詮し、論は慧を詮するもので、經は定に到る方法や定に入つた様子を説き詮はしたものでありますから、念佛宗の如き教宗は即ち經に基いて立てたものであります。經と定とは元來一如であつて、従つて教禪も一如のもの、念佛三昧裏に禪の消息が潜在し活動して居るといふのが黃檗宗の新味であります。一聲の念佛は縦に時間を絶し、横に空間を絶して居るもので、天地の大も此聲に包括され、日月の光も之の聲に覆藏されて居るのであります。臨濟は一喝を以て佛法の極意を傳へ、徳山は一棒を以て法性の面目を示して居るが、黃檗門下では念佛を以て眞如の實相を説破する、釋尊の御聲であると提唱されて居ります故に、一千七百の公案も五千餘卷の經文も皆な此の念佛の一聲に含まれて居るが、彼の淨土門に於ける阿彌陀を念する事に依て、其救濟の慈手に縋ることが出来るとも説かず、亦た其を期待して居らぬ所に黃檗禪の念佛の趣があるのであります。それであるから世間からは黃檗は念



佛禪であつて邪禪だ。純真な如來禪ではないとして、隱元以下の黄檗禪を頗る酷烈に罵倒して居るものもありますが、是は無理からぬ疑ひであります。唯だ隱元等の渡來によりて教界の寂寞を破り、黄檗山の開立に依りて新宗風を聴くことを得たのは、青葉若葉ほの暗き樹下路から杜鵑の聲が漏れた様なもので、血を吐く斷腸の努力を致したる隱元や木菴や高泉や而して我が了翁の如き知識達の盛業は慥かに偉大なものであります。然も黄檗禪は曹洞禪の如く綿密の家風でありまして、了翁の平常心是れ道の行持は、眞俗二諦を融合して、生死の解脱味を日常生活の上に體現したるもので、隱元が常に口癖の様に言ふた「閑忙一如」の生涯が了翁の事業となつたのであります。

隱元創立の功も寂後暫く、木庵、慧林、獨湛等が守成的に黄檗禪の生命を保つて居たが、高泉の大力量を以てしても猶ほ且つ我が了翁の庇護に俟たねば食輪も法輪も山門も動かぬ様なものであつたから、高泉の歿して後は、唯だ我が了翁のみ有つて、黄檗禪の興敗を一肩に擔ふて居つたもので實際に了翁は黄檗門の大棟梁でありました。

了翁歿して亦た氣を吐くに足るの人物なく孤城落日の觀を呈しました。苟くも日本黄檗宗を説くものは了翁が印せし足の跡、手の痕を點檢せねばならぬと思ふのであります。

今日黄檗宗が萎靡として振はず、而も了翁が興造弘經の精神たる結晶さへも佛國寺の荒廢するが如く荒幾して、『黄檗宗』一個獨立の本山たるもの、末派が僅かに五百箇寺にも満たぬ慘状でありますが、天真院に今も殘存せる高泉禪師の遺著『桃蕊編』の花の精か。人の精も何れの日か第二第三の了翁が出現を待て、春風に妍を競ふ法林が再造せらるゝであらう、口門窄く言はざりし桃李よりも言はぬ了翁の拓きし蹊も、既になくなりて、溪聲山色、懷古の杖を曳き我等は二百餘年前の盛蹟を尋ねて、唯だ其人を戀ひ、其徳を慕ふて、呼べば應ふる筈のみを我が了翁が道譽のそれかと傳へ聞くばかりであります。

了翁禪師終

大正十年十一月二十五日印刷  
大正十年十二月五日發行

了翁禪師  
定價金壹圓五拾錢

不許  
複製

發行所

東京市牛込區矢來町十一番地  
東京振替三七六五一番  
電話番町一一八五番

中央佛教社

著者	嵩吉靖
發行者	東京市牛込區矢來町十一番地 飯塚哲英
印刷者	東京市牛込區原町一丁目廿一番地 福原貞三
印刷所	東京市牛込區原町一丁目廿一番地 中央佛教社印刷所

月刊 每月一回一日發行

### 中央佛教

一冊送料共四十一錢  
半年送料共四十二圓十錢  
一年送料共四十四圓十錢

月刊施 每月一回一日發行

### 佛教童話

一冊送料共六錢五厘  
一ヶ月送料共七十五錢  
五冊以上特別割引

月刊 每月一回十五日發行

### 佛教講談

一冊送料共七錢五厘  
一ヶ月送料共九十錢  
五冊以上特別割引

佛教界に於いて發刊せらるる、雜誌その種類頗る多し、佛敎の文字を羅列して、枯槁難解なるか、或は平凡なる、門語を記載して、低級趣味なるか、或は平凡なる、不偏不黨、教界の無趣味なるか、或は平凡なる、實益と富み、苟も教界の論議を研究し、教界の事情に通じ、且つ絶えず新しき論議を研究し、教界の事情に伴侶として、缺くべからざるものなり。

本誌は佛敎界に於ける唯一の月刊童話雜誌なり、お伽噺の大家として全國にその名を知られたる巖谷小波先生は、初號以來毎號必ずその新作童話を本誌に寄せられ、その他有名なる諸大家の童話童話等掲載せられて内容豊富、且つ表紙は頗る美麗なる色刷なると共に本文には多くの挿繪あるが故に日曜學校信徒家庭への施本として、恰好なるものなり。

これは又最も面目を異にせる雜誌にして、訓話、小説、落語、講談、物語、話材教材、奇事異聞等の數項、いづれも佛敎的教訓の意を寫して、面白可笑しきが中に知らず、精神の修養になる、極めて調法なるものなり、布敎家の爲には豊富なる教材を提法し、縁なき衆生をも趣味を以つて誘引す、故に今や發行部數に於いて、教界無比のものとなれり。

三十七大家執筆

### 釋尊の新研究

定價二圓八十錢  
送料十二錢

伊藤聰融先生著

### 曹洞宗行持寶典

定價一圓二十錢  
送料八錢

教界名士執筆

### 簡易生活

定價三十錢  
送料二錢

世に釋尊傳と稱するもの少からざるも、いづれも一家の管見にして釋尊の人格全を盡さず、本書は當代知名學者宗敎家等三十餘氏が、各その蘊蓄を傾けて各方面より研究詳述せるもの、従つて正確なる史實と興味多き挿話と卓抜なる新研究とを綜合せる新しき釋尊全傳なり、佛敎徒は素より、荷も思想宗敎に志あるものは必ず一本を備へ釋尊の全人格に親炙すべし。

曹洞は綿密の宗風を尙び、その行持儀式の精密に規定せらるること、各宗に冠たり、古人が三代の禮樂緇徒の間、ありと讚嘆せるは、正に洞門の宗風を指せるなるべし、而してその行持は、一典據來由あり、著者多年之を研究して得る所あり、仔細に行持の作法及び來由を説いて宗侶をして、據る所を知らしめ、且つ禪門の規矩を視はんとする一般人士の爲に指南車たらんとして著せるもの也。

今や我が國上下を通じて奢侈に流れ虚榮に走り、費澤に耽る、而かも一方には聲を大にして、不景氣を叫び、代表せる碩學者宿の簡易生活を見る、此の際佛敎界を代表せる碩學者宿の簡易生活を見る、此の際佛敎界は實に物價調節の捷徑、景氣挽回の良策なり、文章の平易、所説妥當、在俗に對する高等施本として、恰好の書なり。

蓮生觀善先生著

# 宗教法研究

定價 八圓  
送料 二圓

久しく宗教界政治界の懸案となれる宗教法は愈遠からず制定せらるることなれり、然るに從來之に關する完全なる著書なく、最も關係深き僧侶すら宗教法の何たるか、又その制定が如何に自己に影響するやを知らず、著者は多年宗教の衝に當りて最も精通せる人、歐米及び我が國古來の宗教制度を比較研究して本書を著し、一般宗侶の爲に宗教法に關する詳細なる知識を提供せり。

嵩吉靖先生著

# 了翁禪師

定價 一圓五十錢  
送料 八錢

東京を知らぬものなく、また不忍池を知らぬものなきも、不忍池に辨天鳥を築きたる了翁禪師を知るものなきは不思議なり、了翁禪師は隱元の來朝を迎へ、高泉に法を嗣ぎし黄檗僧にして、圖書館を開き育兒院を設け施藥館を建て勸學院を創立する等、文献教化に對する功蹟甚だ大なり、宗教と社會事業の云爲せらるる時、此の古き社會事業家の詳傳は世を裨益する所大なるべし。

濱地八郎先生著

# 金剛經講話

定價 三十錢  
送料 二錢

金剛經は功德無量の經典として古來在家出家の間に廣く讀誦せられたるものなり、辯護士として複雑多端なる實社會の表裏に通せる天松居士濱地八郎氏は、自ら此の經の眞髓を處世の要諦として常に體驗し、且つ實踐する處なりしが、此の度一卷の大義を平易に講述して混亂せる現代人心の救済に資せんとせられ、即ち本書を公刊せらる。

392  
270

終

